

〈研究ノート〉

戦後初期の学校図書館について聞く（上）

中 村 百合子

はしがき

このノートは、さきに『占領下日本の学校図書館改革：アメリカの学校図書館の受容』（慶應義塾大学出版会、2009）にまとめた研究の資料としたインタビュー記録を、インタビューを受けてくださった先生方ご本人のご了解を得て公開するものである。インタビューは、当時の学校現場に教師として勤め、戦後をとおして日本の学校図書館に関わって活躍された先生方を対象に、1999（平成11）年から2002（平成14）年に行った。ご協力いただいたのは、芦谷清氏、今村秀夫氏、笠原良郎氏、北嶋武彦氏、鈴木英二氏、室伏武氏、松本武氏である。その7名の先生方に対するインタビューの記録のうち、今回は、芦谷氏と鈴木氏の記録を全文、公開する。

インタビューでは、先駆者の方々と筆者の対話をとおして、これまで記録されてこなかった占領期の学校図書館改革のいくつかの側面について明らかにしたいと考えた。うかがったのは、まず、学校現場にあって、戦後初期に学校図書館に関心をもつようになった経緯と、その仕事の担い手となった経緯である。当時の学校現場で先駆者の方々がどのようなことを考えていて、その考えや行動にはどのような個人的または社会的な背景があったのかということを知りたいと考えた。そしてもうひとつ、当時の学校現場にあって、占領軍と文部省による学校図書館改革の取り組みからどのような影響を受けたかを尋ねた。現場にあって先駆者の方々が占領軍や文部省の周辺で起きていた動きをどのように受けとめていたか、アメリカの影響を受けたか、また現場で独自に考え進めていたことがあったか。そうしたことを中心にお話をうかがい、インタビューはそれぞれ約2時間にわたった。時間が許すようで

あれば、戦後の学校図書館史についての総括的なご意見も、各先生が過去に書かれた雑誌記事などをてがかりにして、聞いた。今回の記録の公開にあたり、背景の説明を加える意図から、記録に注をつけたが、これはすべて筆者が記したものであり、その部分の責任は筆者が負う。⁽¹⁾

芦谷氏には、この記録公開にいたるまで、何度も原稿の内容の確認でお手をわずらわせてしまった。毎回、気持ちよく、問い合わせにご回答下さった先生に、心から感謝を申し上げたい。ありがとうございました。

鈴木氏とのインタビューでは、記録を取らないよう指示された箇所があり、その会話については、この記録にも含めていない。レコーダーが動いていなくて、ちゃんと記録ができていなかったと後からわかった部分もあった。先生は、後のち公開したいとお伝えしていたので、インタビュー記録とまたその欠損部分の確認・修正のためにふたたび会ってくださったのだが、そのときは病床から起きてきてくださった（そのときは録音しなかった）。博士論文を仕上げふたたびお会いしたいと思っていたが、その後、3ヶ月もしないうちに、2001（平成13）年7月22日、鈴木先生は逝去された。見知らぬ大学院生の私のインタビューのお願いの手紙に返信をし、重い病をおして病床から起きて、私のつたないインタビューに付き合ってくださいました鈴木先生が、どんなお気持ちでおられたのか、そのときはよく想像していなかったように思う。大学院生で自分の勉強のことばかり考えていたように自分が思い出され、とても恥ずかしい。そのうえ、テープに欠損部分の出たことは、大きな失敗で、後悔してもしきれない。しかし、今回この記録を公表することで、あのときインタビューに向き合ってくださいました鈴木先生のお気持ちが浮かびあがってくれば、またその理解者があらわれることになれば、と思う。

芦谷清氏へのインタビュー記録

インタビュー実施日：1999（平成11）年12月9日（木曜日）

芦谷氏略歴：1926（大正15）年生れ。1950（昭和25）年、文部省図書館職員養成所を卒業、東京都板橋区立上板橋第一中学校で社会科の教諭となる。

1955（昭和30）年に全国学校図書館協議会に移り、1979（昭和54）年、専修

大学教授となった。⁽²⁾

中村 まず、ご経歴についてうかがいたいのですが。図書館職員養成所を出られる前に、何かで拝見しましたら、教員でいらっしやっただんですけども、それは・・・

芦谷氏 それは、私はねえ、えっとどっから言ったらいいだろう。中学か。中学を卒業して、それから師範へ入って、東京第三師範 [学校]。それからそれを卒業して、小学校へ1年勤めて。それから、図書館職員養成所へ入って。

中村 それは全部戦後のお話ですよ？師範は？

芦谷氏 師範は戦争中だからもう、大体勉強はあんまりしていなかった時代で。もっぱら農場作業。僕は、体が弱いっていうことになってたからね、だから会社への動員じゃなくて、だいたい農場作業をやってた。第三師範っていうのは、[東京都練馬区] 大泉にあるんで。非常に農場が広くて。非常に大きな農場があって、そこでやっていたわけ。それで、卒業して、小学校。今の稲城市。当時稲城村。稲城第一小学校っていうのがあって、小学校に勤めて・・・

中村 それは何年頃ですか。

芦谷氏 それは昭和22年。47年だ。小学校の教員になったの。それで1年やって、それから図書館 [職員] 養成所へ2年間。

中村 それは、なぜ養成所に入ろうと思われたんですか。

芦谷氏 いや、僕は、小学校の教員には、向かないわけだったんだよね。非常に偏りがあって。

中村 それは科目によってっていうことですか。

芦谷氏 科目によってっていうか。要するに、技能関係のことがほとんど駄目だから。それで、ま、教員に向かないわけなんだよな、本当を言えば。だけど、うちが皆教員だから。うちがって言うのは、親類や、親父や何かも全部。そういう関係もあるから、自分の生活と、子どもの頃から、非常に密着した存在だったわけ。それで師範に入り、小学校に赴任した。でも、小学校はもうはじめっから向かないことはわかってて、で、うまく行かな

かったわけ。やってみなくてもわかってんだけどそれは。昔は、師範っていうのは、卒業すれば行く先があった。今の学芸大学とは違うから。卒業生は行く先、就職先は困らないわけ。だけど、何処へやられるかはわからないわけ。私は小学校に向かないことはわかっていたので、それじゃまあ学校もいいけど、これからは図書館が発展しそうで、図書館〔職員〕養成所っていうのが募集するからっていうので、図書館〔職員〕養成所を受けたわけ。で、そういうことで、図書館〔職員〕養成所を出てから、今度は中学校の教員になったわけ。中学校なら勤まるっていうことは、ある程度は予想してた。今の中学とは違うからね。今じゃもうとでも勤まらないって家内が言うけれども（笑）。うーん、で、まあそういうことで中学校の教員を5年、やってたけれどもね。で、きっかけになったのは、卒業した旧制中学校〔東京府立第九中学校〕の時のイメージがあると思うんだよね。中村 養成所に入った時には、一応公共図書館の職員になろうと？

芦谷氏 うーん、それは、はっきりした目標はないけれども、一応、所長（舟木重彦）なんかは、公共図書館の経営なんかでもやって・・・やらせたいなあなんて言っていたころもあったけれども。それほど公共図書館もたくさんなかったし、公共図書館へ行くとは思ってなかったけれども、でもまあ、第一の目標にはしてたように思いますね。まあ、図書館員養成所って2年だったのね。で、1年終わった時に、文部省にいた深川〔恒喜〕さんという人が、仲間がお茶の水女子大の図書館にいるっていうわけだよ。だからね、辞めて、お茶の水女子大の図書館へ行かないかってね。1年で辞めてっていう話があったわけ。だけど、行ってみたらさ、薄暗いところで。そこで一日中机に向かっているのはおもしろくないなあっていう気がしたわけ。

中村 ええ、はい。

芦谷氏 で、私はやっぱり大学図書館には行きたくないなって、思ったわけ、その時に。図書館と言えば公共図書館という、頭はあったと思うよ。ところがその時にね、『学校図書館の手引』が編集途中にあったわけ。あれは23年の12月にできた。僕は23年4月に養成所に入ったわけだからね。で、その時にね、上野のあの〔国立〕図書館の館長、最初は文部省にいた加藤

宗厚さん。あの人が、『学校図書館の手引』の編集委員だったんで、それで、授業中に、学校図書館の話をしてくれたわけ。さらにその前だけれども、入試の時にね、岡田〔温〕さん、岡田先生が、館長だったわけ。〔国立図書館〕附属〔図書館職員〕養成所だったから。で、館長で、うーん、まあ、面接の中心になってたわけね。それでまあ、加藤先生もいたんだけど、加藤先生は何も言わなかった。それで、岡田先生が、あなたは九中の卒業生で、鳥生〔芳夫〕先生というのは知ってますか、と。それからもう1人、これは岡田先生の親類だったんだけど、関根先生を知っていますかと言われた。関根俊雄っていうんだけどね、その人は。私はその人に文法なんか教わって、大変興味が湧いたんだけど。関根先生の一家は学者でね。加藤先生がそういう『[学校] 図書館の手引』の話なんかをしてきて、そして今言うように、中学の時の図書館の中心だった鳥生先生の話が出てきたというようなことでもって、これからは学校図書館という方向もあるのかな、という気がしたわけ。

中村 で、分類に興味を持たれたのは、養成所にいらした時なんですか。

芦谷氏 いやいや、まあそれはちょっとまあ後にしてさ。それからね。直接のきっかけになったってほどじゃないのかもしれないけどさ。養成所の1年の時に、6月だよ、入ってまだ間もなくだけど。その時に、私その頃、池袋、豊島区の方に住んでいて、子ども会をやってたわけ。うちの前がお寺で、そこでやってたわけ。そこのお坊さんが非常に熱心だったから。で、子ども会を通じて、図書館に関する研究会があるというその案内が来たわけ。区役所でやると。区が主催したんだと思うけれども。で、そこへその日比谷図書館の館長の中田邦造っていう人と、それから文部省の深川さんっていう人が来るということで、そこで、深川さんに初めて会ったわけ。で、深川さんが学校図書館の話をいろいろやったけれど、夢みたいな話で(笑)、子どもたちが百科事典を作る・・・まあ、そのような意気込みでやらなきゃいけないって話だったと思うけど。百科事典って・・・。今まで自分が見てきた子どもにしても、指導してきた経験からしてもね、子どもたちが百科事典を作るようになるっていうようなことは考えられないな、っていう風に思ったわけ。でも、時代が変わってきたんだな、っていうことで。

師範の頃にも新しい教育の勉強はやってたからね。それから、養成所の2年の頃に、[東京都立]白鷗高校でアルバイトをやってたわけ⁽³⁾。だから、そういうことで、非常に、学校図書館に対する関心っていうのは、深まっていったって思うのね。うーん。学校図書館っていうものを、中心に考えるようになっていったんじゃないかと思うんですね、そういうことがあったから。

中村 そういような、高校でアルバイトするっていうようなことは、養成所ではよくあったんですか。

芦谷氏 うーん、あの、高校とは限らない。とにかくね、養成所っていうのは半日なんだよね、授業は。午前中で終わるわけ。午後は自由研究、自主研究。だけれども、当時のことから、皆、アルバイトに行ってたわけ。で、アルバイトの口はいくらでもあった。

芦谷氏 前に戻って旧制中学の図書館の話をするね。図書館を作るっていう話になったとき、図書館を作るには上野[にあった帝国]図書館の・・・図書館って、当時あんまり無いんだから・・・指導を受けるのがいいっていうことで、行って、で、松本[喜一]館長も勿論来てくれたらしいけどね。その岡田先生と加藤先生が中心で、だいたい指導してくれたわけだ。

中村 それは鳥生先生が作るって決めたんですか。

芦谷氏 いやそれは校長が決めたんだよ。学校のことだもの。鳥生先生はその係に任命されたんだろうね。まあ鳥生先生がどういういきさつで任命されたかは知らないけれども、任命されて、それで、ずっと図書館は鳥生先生っていうことで、やってきたわけです。その図書館は、350人入る閲覧室があって、それでまあ本は、私が入った頃1万冊。で、校友会っていうのがあって、そこから図書館費が出て。その他に入学したときに図書費として1口5円の寄付を集めたんだよ。5円っていうのは、当時の授業料だったの。まあ要するに図書館っていうのは関心があったわけ、学校自体が。

中村 何で、でもそれ、校長先生が決められたんでしょねえ。

芦谷氏 何で決めたんだろうねえ⁽⁴⁾。そういう話っていうのは、とうとう聞かなかったなあ。まさか私が図書館をやるとは、思わなかったし。

中村 何ていう方が、覚えてらっしゃいますか。

芦谷氏 常田宗七っていうんだよ。で、これはあの、長野県の出身でね。小諸の島崎藤村の弟子なんだよね。島崎藤村の小諸の塾で教わってるわけ。それから東京へ出てきて、日本中学〔校〕っていうのに入って。で、それから一高・東大。西洋史の先生だったわけ。それでそれから、日本中学っていうのは、校長が杉浦重剛っていうね、皇太子〔昭和天皇〕に講義をやったって言うような、大変また藤村とは違った発想の人（国粹主義者）の学校だったわけね。それで、校長の頭の中には、大変違った、その国粹主義的などころもあるけれども、一方で非常に自由主義的などころもあるわけね。で、校長は非常にうさかった人だけどね、校長のことを悪く言う人はいないよね、当時の先生で。色んな先生がいるけどもね、立場も考えも違う人もいるけれども、まあ校長をやっぱ悪く言う人はいないし、卒業生も校長の偉大な面を評価しているけれどもね。靖国神社の参拝なんてことも、学校が優先的に扱われていたりして、そういう意味じゃ、国粹主義だったけれど、一方で、非常に自由主義的などころもあったから、校長は、俺は自由主義だから、これからの時代には合わねえって朝礼の時によく言ってたけれども。それは校長だけじゃなくて、学校にも、あったと思うのね。先生たちの間でも。

中村 ああ、はい。

芦谷氏 九中の創立は昭和3年で、建物が出来たのは7年（図書館が落成したのは昭和8年11月）だけれども、（昭和3年の11月の）天皇の即位、御大典の記念っていうんでね、そういう意味のものが中等学校には多かったのね。中学校の図書館っていうのは、いわゆる綴り方教育などの一環として考えられたものでなくて、学校の創立記念として図書館を作るとかね、それから、天皇のご大典記念ね、即位のね。それで、図書館を作るっていうような、そういう発想があったわけね。で、まあ大正から昭和のはじめだから、その頃の自由主義的な思想っていうのは、ブルジョア的な意味の自由主義ね。それを背景に学校図書館はほうぼうにできたと思うの。戦前の学校に、図書館のあるところは多かったと思うの、中等学校で。上野の図書館の指導で、そういう標準的な運営をやりようとした、NDCなんかを使って、運営をやりようとした図書館なんかは、当時そう多くはなかったと思う

けどね。

中村 この、加藤先生、岡田先生に指導を受けるようになったいきさつって
いうのは、何だったんでしょうねえ。

芦谷氏 学校で？それはね、図書館やるならね、上野の図書館の指導を受け
なきゃしょうがないっていうのは、あったんだよね⁽⁵⁾。

中村 そういうのを思いつく校長先生だったってということですか？

芦谷氏 それは、校長先生だったか、鳥生先生だったか知らないけれども。やっ
ぱり図書館をやる以上は、という発想があったと思うんだよね。それで、
そういうあらわれみたいなこと、小さいことだけどね。昔、中学は5年
制だったのね。で、3年生の時に、作業の時間っていうのがあってね、作
業っていうのは工作なんだよ、1年生、2年生では。で、3年生で選択科
目なの。それで地理とか歴史とか珠算とか測量だとか、いろいろあってね。
いわゆる普通の授業じゃないものもあったわけ、いろいろね。理科やなに
かもあったけど。で、その中に図書館[科]もあってね。で、それは、図
書館員の専門教育に近いようなことやってたよね。僕は珠算をやってたか
ら図書館には行かなかったけれどもね。図書館の見学に行ったりね、製本
やったりね、それから、図書館学の小ちゃいようなやつをやったり。利用
するってというような立場じゃなくてね。利用はまあみんなするんだから、
図書館科として選択科目でやるんだから、まあ小型の図書館学をやったわ
けだよ。そんなことどこかに書いてあるけどね⁽⁶⁾。どんなことやったかっ
ていうようなの。

中村 え、それ先生が書いたんですか。

芦谷氏 違う違う、鳥生先生が書いたの。

中村 戦前の話。うーん、何かの時に書いていた……。それは、『私たち
はこうして学校図書館を作りました』⁽⁷⁾とか、そういうのじゃなくて。

芦谷氏 うん、『私たちはこうして学校図書館を作りました』っていうのは、
戦後早くに出た本だから。あれは、作ったんじゃないくて、それこそ作り話
だよ(笑)。

中村 え、そうなんですか？

芦谷氏 だからさ、皆そういう図書館が出来たと思って、来たわけ。そうし

たらそれは、とんでもない図書館だったっていうんで（笑）。

中村 え、どういう意味ですか。作り話って。戦前からもう出来てたからって
ということですか。

芦谷氏 私たちはこうして作りましたっていうのは、戦後の話ですよ、あれ
は。もう戦前の図書館っていうイメージとそれは全然違うんだから。九中
の図書館は上野の図書館の小型みたいな図書館だったんだから。中学校の
図書館なんていうのは。本なんか皆すごく難しい。今なら大学だって読ま
ないようなもの。僕なんか有朋堂文庫だとか、日本古典文学大系だとか、ああ
いうのだって読んで。古今集から新古今集までの八代集なんかみんな読ん
だもん（笑）。

中村 ああ。いわゆるじゃあ教養主義的な。

芦谷氏 教養主義的な図書館ですよ、うん。もちろん学習にも役立つけどね、
さらに掘り下げて考えたりするのに。先生たち皆、学者だからね、あの頃の
先生は。

中村 ああ。そういう図書館ですか。

芦谷氏 で、『私たちはこうして学校図書館を作りました』っていうのは、
戦後の発想で書いたもの。で、それはあくまで、こうして作りましたって
いう、作った話で（笑）。でも、あれは非常に上手くできていて、しかも
読んでみるとつじつまが合っているしね、うまいんだよね。フィクション
だよ、中身は。だって、自分の所は12坪の非常に狭い図書館でね、物置の
2階に作った。上板橋〔第〕一中〔学〕っていうんだけど。

鳥生さんっていうのは、庶民的な考え方が非常に強い人だったよねえ。
だから、物ではなくて、精神的なことを重んじた。クリスチャンだったこ
ともあったろうけれども。で、図書館なんかもそういうことで、自分たち
のやれる範囲内で、しかも内容的には充実したものを、やっていこうって
いう発想があったと思うの。学校教育全てそうだもん。何もないけれども、
ともかく他に負けないうって、学校全体がそういう雰囲気だったもん。
もう、4月から3月まで行事ばかり。コンクール、競技、ぶっ続けだもん。
新しい行事もどんどん入ってくるしさ。で、体育と芸能と両方だもん
ね。そういう学校だったからね。だから図書館なんかも、図書館が中心だ

とかそういう発想は必ずしもあったわけじゃなかったけれども。図書館も日本でそれなりのものにはしたいって言うことだったけれども。でも金はないし、現実的に即してってことはあったと思うけどね。

中村 この、鳥生先生が戦前にやっていた図書館というのは、閉架ですか。

芦谷氏 閉架です。で、今の〔東京都立〕北園高校はね、天道〔佐津子〕さんが閉架式図書館の最後の司書教諭だけれどもね。新しい校舎ができるまで閉架式だったの。

中村 じゃあ借りることは？貸出機能は？

芦谷氏 ええ貸出はしました。戦前は、図書館の貸出っていうのは、閲覧室で見ることであったよ、上野の図書館をはじめとして。貸出した図書館もあるけどもね、多くは館内閲覧だった。あんまり貸出をしないわけだよ。それをまあ、今日から明後日までって3日間1冊だけだけね、貸出をやってたわけ。まあそういう点では、進んでたわけだよ。

中村 で、その小難しい本がいっぱい並んでたわけですね。

芦谷氏 うん、まあ本は難しい本だよ。今なら中学で童話とか言うけれども。そういう発想は先生にもなかったと思うね。で、また読む奴は読んでたからね。

中村 はあ、じゃあやっぱり戦前も日本にも学校図書館は違う種類だけれどもあったんですね。

芦谷氏 勿論ありましたよ。

中村 それって私たちの世代から見ていると、紙だけで見ていると、やっぱり学校図書館は戦後の物っていう。

芦谷氏 教育課程の展開に寄与する図書館っていう。さっき深川さんが百科事典を作るって……。そういう発想は戦前にはなかったと思うんだよね。教養主義的な図書館だからね。ただ、一部分ね、大正自由教育運動や生活綴方教育運動にかかわりを持った学校や教師により、子どもたちの自主的学習を強調する、そういうことでやってきていた人たちのところでは、図書館がある程度重んじられてたよね。非常に限られた学校だったですよ。それでも、文庫なんかやったりしている人もあったわけね。私の出た小学校は図書館なんかは勿論なかったけれども、5月5日の創立記念日、当時

は5月5日の創立記念日が、多かったんだけど。それと関連づけて、毎月5日、皆1銭ずつ持って来いって。1銭文庫っていうのをやってたわけ。皆1銭ずつ持ってくると。当時は1クラス60人から70人いるわけだよ、そうすると60銭から70銭集まる。で、そうすると、当時は1円の本っていうのは高い方で、50銭とか40銭とかで買えたわけだ。で、買った本は、教室に本箱があって、並べていたわけ。ま、勿論クラスで買うっていうんじゃないくて、学校で買って配ったんだけどね、各教室にあった。

中村 じゃあ学級文庫も戦前からあったわけですね。

芦谷氏 学級文庫もあった。僕らのところでは、そんなに機能を果たしたわけじゃないけれども。それでも皆が休み時間に自由に読んだり、それから、先生が、読んでくれたりね、そういうことはやっていたよね。で、それは全学級にあるわけ。1銭ずつ集めて領収書ももらってた。

中村 じゃあ、鳥生先生のこの図書館から、潜在的には影響を受けていたけれども、それは、やっぱり戦後に先生が実践されたものとは、別のものなんですよね。

芦谷氏 うん。それは別のものだけれども。

中村 影響している？

芦谷氏 やっぱり養成所へ入ってということがあった時に、中学の図書館を思い出したよね。小学校の文庫っていうのは、あんまり、図書館とはいえない。私が住んでいたうちのすぐそばに児童の村小学校⁽⁸⁾があった。

中村 ああはい、池袋児童の村小学校。

芦谷氏 で、あれ、なんかも。城西学園っていう中学校があって、その隣にあったけれども。まああいう小学校なんか、私なんかが見ると異様な感じがしたよね、普通の学校から見ると。ああいう学校っていうのは、で、一方、親父が奈良女高師、今の奈良女子大の附属の研究会なんかに行って、木下竹次の『学習原論』⁽⁹⁾なんていう本買ってきて、僕は子どもの時それを読んでただけだよ（笑）。非常に変わった授業をやってるわけね。だからある意味じゃあ、非常におもしろいなど思ったんだけどね、やっぱり異様な感じがしたよね。教育には、ああいうのがあるのかと思って。で、そういう時代だけれども、普通の学校にも、今のように、本を揃えて読ま

せようというところは、たくさんあったんだよね。ともかく特に中学が戦後の学校図書館につながっている、人もつながってるわけだし、という感じはするわけ。

中村 上板橋〔第〕一中〔学校〕に行かれますよね。それは教員として採用されるわけですよ。

芦谷氏 そうです、そうです。

中村 だけれど、一部の授業が免除されて、ちょっと少なめになって、司書教諭・・・それは校務分掌なんですか？

芦谷氏 うん、校務分掌。それで、ともかく校長が言うのには・・・養成所を1年で辞めて来いっていうんだから。せつかく入ったんだから駄目だよって言って。僕の前任者は国会図書館へ転勤、中国文学かなにかやった人だよ。で、その人の後に、私は行ったんだけど。図書館っていうのは、何でもやるんだ、社会科も何でもやるんだ、だからおまえは社会科だって。こういう風にして決まったわけよ（笑）。あれは、免許状は逆に担当科目で決まったのかなあ？で、そういう風に決まって。講習も受けに行っただけども。それで、まあ社会科⁽¹⁰⁾。

中村 足りなかったんですか？当時社会科の・・・。

芦谷氏 いやいや足りなかったんじゃないくてね、当時、こういうこともあったわけよ。まあ戦後早い・・・22年に中学校がスタートして、その頃はね、海のものとも山のものともわからなかったわけ。だから中学の教員になり手が無かったわけね、最初は。

中村 そうか、そういうこともあった、と。もしかすると「時代」っていうのはキーワードになるかもしれないですねえ。

芦谷氏 うん、「時代」だと思うよ。そういうこの当時の教育のひとつの大きな柱だったからね、図書館っていうのは。他にもそういうのがあったと思うよ。

中村 他にはどういった柱があったんですか。

芦谷氏 さあそれはわからないね。当時かなり熱心だったのは、生活教育とか。それから、あの新聞教育もそうでしょう？そういった自主的な学習を中心にすえたようなね、今は総合的な学習で取りあげてるけども。郷土学

習だとかね、そういった色んな分野が、あったわけね。

中村 その中のひとつだったわけですか。

芦谷氏 で、それぞれに、皆やっぱり、何かしたいっていうような、熱心な連中がいて、やってたわけ。で、それで、今までそれなりに続いているところと、消えちゃったところと、あるけどね。

中村 そうやって、色んなのがあったの、ひとつが、学校図書館だったと。

芦谷氏 うんうん、だと思ふ、私は。自分はまあ学校図書館の社会にいるから、それしかないみたいに思ふけれども。それは、そうじゃないと思ふんで。それぞれ相当な人がいて、指導的な役割を果たした人がいて、現場の先生でも、しっかりした人が随分いたし。そういう人にも協力してもらったり、したけれどね。

中村 そういった、いろいろあった中で、たまたま何かに導かれて、ここにいた人たちが、皆、学校図書館に。

芦谷氏 っていうことだよな。

中村 で、先生が現場におられた頃、5年間おられた頃の『学校図書館』の記事を見ると、学校図書館についての未来っていうのが、このまま進むっていうので、例えば阪本[一郎]先生だとか深川先生だとかは、わりと・・・、まあ本心はわからないですけど、楽観論みたいので。で、一方で、例えば、鈴木英二先生みたいに、実は、学校図書館は定着していなくて、みたいに暗い意見があったりして。それが混在してましたよね。だけど、そういうところに、会なんかに先生も座られて、お話している時に、あんまり先生って、未来のことは仰ってないんですよ。

芦谷氏 未来のことは言っていない(笑)? そうね、その点、僕はだいたい現在のことしか考えてない。

中村 その当時は、どうお考えになってたんですか? 先生ご自身は、学校図書館の未来はどうなっていくって考えてらしたんですか? 現場にいらした時。

芦谷氏 まああんまり考えてなかったんだと思ふんだけどね。あの一、やっぱり日本の教育に学校図書館が定着するっていうのは、ある面じゃ無理もあると思ふ。

中村 それは今ですか？

芦谷氏 今もそう思ってるし、当時もそう思ってたの。あの一、それよりも、学校図書館よりもね、子どもの自主学习ってことがね。僕は師範で教生やって、附属だから色んなことも工夫して、クラスの方でも、明日の授業どうやろうかっていうことを相談して。それで、まあ、子ども中心に活動させるような、そういう教育を考えて、やってたわけね。そのなかで、教育大のそばの〔東京都・文京区立〕窪町小学校っていうのを見学に行ったわけ。そうしたら、机はちゃんと普通に並んでてさ。先生がさ、普通の授業をやってるわけだよ。で、附属じゃあ、非常に新しい授業やってるけどね、他ではそういう風な状況があったわけ。稲城の小学校に勤めるようになって、机をくっつけて。大正時代のでこぼこの高いの低いのはげたのひどい机だったけど、それを組み合わせてね、授業をやったりして。中学でもそれをやったけどね。だけれども、もう一方では、戦後でも、戦前と同じ形の授業が行なわれてるっていうことは、あったと思うんだよね。それでね、そういう状態の学校が随分あって、1958年の指導要領の改訂、あれが一番大きな改訂だったと思うけれども、あれで系統学習ってものになってしまった。で、図書館っていうものは、系統学習だからいらなくていうものじゃないっていう考え方は、当時あったわけだよ。系統学習なら余計必要じゃないかって思ったの、むしろ。

中村 どういう意味でしょう？

芦谷氏 系統学習っていうのはね、文部省はどう考えているのか、僕は、あんまりそれは詳しくないけどもね。でも、学校図書館のことだからさ、やっぱりそれは関心ないわけじゃない。で、系統っていうのはね、学問の系統と、子どもを教育する時の系統っていうのは、違うんじゃないっていうような思いはあったわけね。やっぱり子どもの発想に従った系統っていうのが、考えられなければいけないんじゃないかと。で、それまでは経験主義だからさ。で、経験中心にして構成していくっていうことは、ものすごく難しいことだよええ。附属でやってみての経験でも・・・。で、系統学習っていうのは、それよりやりやすいわけだけれども。ただ、子どもの発想に即した系統っていうのが無くちゃいけないと。学問の小型みたいな

やったって、そりゃものにならない。で、そういう風なものでやっていくっていうことになれば、限られた教科書だけでやってけばいいんだ、ってことにはならないんじゃないかと。系統学習だからこそ、そこには様々な資料を使って、その内容を充実させたり、あるいは見方を教わっていくとかね、そういうものを入れていかなくちゃいけないんじゃないかと。というような考え方はあったわけで。図書館ていうのは、もっと学習と結びついていく形があるんじゃないかと。むしろ系統学習だからこそ、生かされるんじゃないかと。そういう風なことを思ったことがあるわけ。で、私が書いたわけじゃないけれど、特集なんかもね、やったことがあるんですよ、雑誌で。佐野〔友彦〕先生が思いつきで。

中村 ああ、系統学習と両立するか、みたいなのですねえ。はい。いつのだろう？

芦谷氏 昭和30年ころだね⁽¹¹⁾。で、そういうものを、あんまり大きく取りあげる機会がなかったけれども。結局、そういう風な発想は、扇谷尚さんっていう、大阪大学の先生一前に〔東京〕学芸大にいたんだけどもーに書いてもらったりして、やったことはあるけれどもね。で、その頃に、『社会科学習資料解題』⁽¹²⁾っていうようなものを、分担してやってもらったわけ。で、そういったようなこともあるので。図書館が無くなってしまってもいいっていうようなことは、思ってなかったよな。その無くなってもいいんだっていうか、学習にはつながりが無いんだとは、思ってなかったよな。その後、一方では読書指導が盛んになってね。「母と子の20分間読書」⁽¹³⁾だとか、そういったものなんかいろいろあるわけでしょ。それで、読書への関心が高まってきた。読書は必ずしも図書館じゃなくたっていいわけ。だけど、椋〔鳩十〕さんなんかは学校図書館を、ある程度視野に入れた活動をやってるしね。そういうようなことで、日本は、やっぱり日本独特な資料の使い方みたいなことが、出てくるんじゃないか、出てくるってまあ作らなきゃいけないんだけど。そういうものがあっていいんじゃないかと思ったわけ。

中村 先生が、いつだろう・・・書かれた本の中で、まず、ここで、再び盛んにしたのは、学校図書館法の成立っていう風に、仰ってるんですよ⁽¹⁴⁾。

ということは、先生の中では、占領があつて、学校図書館の新しい概念が入ってきますよね、盛り上がりますよね。だけど、1回盛り下がって、そして、学図法で盛り上がったっていう捉え方なんですか？

芦谷氏 うーんと、これは・・・

中村 ここに、盛り下がりがあつたか、つていうことに興味があるんですけども。ここに。

芦谷氏 盛り下がつたとは言えないかもしれないね、必ずしも。下がつたつていうのは、さっき言つたような状況で、結局一方では、はじめから系統学習が行なわれていたわけだよ。

中村 普通の学校では。

芦谷氏 そういう学校が、かなり最初つからあるわけ。それで。まあ法律。指導要領は法律じゃないけれども、法律みたいなものだから。系統学習が出てくるわけだよ。

中村 へえ。

芦谷氏 法律の制定については、議員やなんかそう言うけれどもね。そりゃあ現実が無いところじゃ法制化は行なわれないう・・・そういうことがあるわけですよ。だから、そういう裏づけがあつたと思うのね。だけど、例えば昭和33年に〔全国学校図書館協議会の〕全国大会を岡山でやつた。で、その頃なんかは学校図書館を使つた学習指導なんつていうのが、相当盛んになつていたわけ。かなり参加者も多かつたし、教科の図書館の利用に熱心だつた。ただ、多分に形式主義的などところもあるんだよねえ。私はそれが、いいのかなと思う部分もあつたけれどもね。

中村 どういう意味ですか？形式主義的つていうのは。

芦谷氏 いや、要するに、資料を使うつていうことが先にあつてさ、それで、その資料をなんかと結びつけて、逆に、資料を使わなくてもいいよなところで使うつていうようなね。これでも資料を使つたことになつますか？とかね（笑）。そういう発想があつたんだよね。で、そういうことがあつたけれども、まあ学習における図書館の利用つていうのは、岡山の大会や次の東京の大会を中心にしても、かなり盛んではあつたね、当時。だから、そういう状況があつたから法律で制定されたのか、法律がそうしたのか、

それはちょっと何とも言えないけれども、やっぱりきっかけにはなってると思うよね。

中村 学[校]図[書館]法の前っていうのは、ずっと盛り上がってたんですよ。

芦谷氏 うん、盛り上がってたっていうのは、要するに、その、自主学習のためには学校図書館が無くては、という考え方の強い人たちが集まってる場所では。

中村 ああ、そういうことか。じゃあ現場でそれは全部一般化したとは言えないと。

芦谷氏 うん、それは一般化したとは言えないと思うのね。そのさっき言ったような学校も多かったから。だけど、雰囲気としては、まあそうとう盛り上がったっていうことは、言えると思いますよね。ある程度の人はやってたわけだから。

中村 学図法の制定には、先生は関わっていらっしゃるんですか？

芦谷氏 うーん、直接には関わっていない。うん、あの、関わった中心の人は、皆死んじゃったから、しょうがないけれども。もっとも手伝いには行ったけれども。中心的なことはやっていない。

中村 でも外から見ていて、何か、思い出すことは・・・。誰が中心で・・・

芦谷氏 それは松尾[弥太郎]さんですよ、やっぱり。それで勿論議員にいろいろ働きかけたり、文部省もやらなくちゃならないようにしたり。

中村 あの、前の文部大臣の町村[信孝]さんのお父様(町村金五)だとか、大西[正道]先生とか、そのへんっていうのは、どうやって・・・松尾先生が働きかけて、巻き込んでいったんですか？

芦谷氏 うーんと、それはねえ。何かに書いてあったと思うけれども⁽¹⁵⁾、組合・・・日教組の中にも学校図書館をなんとかしようっていうことはあることはあった。それと、結びついたんだよね。社会党も学校図書館の制度化を考えていた。

中村 じゃ、日教組の歴史をほじくってみても・・・。日教組の当時の中心人物のあたりに学校図書館に興味を持っていた人っていうのは、出てくる可能性あるんですか？

芦谷氏 うーんとねえ、必ずしもそれは多くないと思うねえ。大西さんあたりは、政策推進の中心で動いた人だから。強い人だしね。

中村 強い人？

芦谷氏 うん、性格的に。

中村 ああそうですか。

芦谷氏 だから、そういう点があったということで。仲間がいたってことはあると思うけれども。かなり深く考えた人っていうのは、誰だろうなあ。うーん。何人か、社会党、それから日教組じゃない人でも、いたけども。えーと、例えば、栃木県の出身の相馬〔助治〕さんだとかね。

中村 その人は議員ですか？

芦谷氏 参議院議員。何だったっけなあ、社会党かなあ。それから、日教組出身で何人かそういう人がいたかっていうのは、ちょっと・・・

中村 日教組、社会党、全国 SLA っていうのが、軸なんですね？組織って言うことで言うと。

芦谷氏 直接は社会党と全国 SLA と言っていいのかな、ちょっとわからないけどね。その頃は、各党が乱立の時代で、お互いに結びついてたからね、それぞれ。ただね、大西さんっていうのは、その中で中心になって。町村・・・町村氏は改進黨。

中村 図書館をやるのはいいことだっていうのは、なんとなく雰囲気としてあったんですか？

芦谷氏 そりゃあったね。それはそうだと思うね。なんとなくそういう・・・

中村 それは社会全体がっていうことですか？

芦谷氏 社会全体がっていうほど・・・。社会全体は、関心が・・・それほど期待はなかったでしょうねえ。

中村 でも、教育界にはあった。

芦谷氏 それもさっき言ったような状況があるからね。一方では、自主学习っていうようなもの自体が、あまり盛んじゃない部分っていうのが、相当あったと思うのね。それも、僕はまあいくつかの例でそう言うだけで、実際に、そういう話っていうのは、取材したら面白いと思うけどね。当時の教育っていうのは、どういう風にやっていったかっていうね、学校で。そういう

のがあるといいと思うんだけど。だから全体と言っても、それはなんとも言いようがないね、そのことは。

中村 うーん。ところで、教育基本法が出て、学校教育法が出て、施行規則が出るじゃないですか。その施行規則の中で、本当の意味で全校に配置されるっていうことが決まっていますよね。その、置かなければならないっていう1文がなぜ入ったかって言うのは……。まだ明らかにされてなくて。

芦谷氏 されてないね、それは。

中村 それにはすごく興味があるんですけども。

芦谷氏 それは……。それがどういう風に入ったかっていうのは、それは時代が終戦直後だから、なかなか。わかりにくい。知らないなあ。知ってる人っていうのは、誰だろうなあ。1947年だもんね。で、図書館以外のものは、皆学校にあったわけだね、すでに。保健室から何から。

中村 そうなんですよ。あの、校庭だとか、そういうレベルじゃないですか。

芦谷氏 で、図書館は、さっき言ったように、無かったわけじゃないんだけど、中心的な存在じゃないもんね。で、結局それはアメリカの影響を受けてると思うけれど、誰がそういう風に判断したかっていうのは、ちょっとわからないね。だけど文部省の中にそれをやった人がいるんだろうね、これが出てくるんだから。文部省がやらなきゃ出てこないと思いますよね。それから史料、この当時のっていうのはなかなか、まとまって、残ってないんだろうねえ。

中村 そのへんの法律関係っていうのはそうでしょうかねえ。

芦谷氏 それは、そのへんは、研究する主題としては、いい主題だと思うけれどもね。なかなか簡単には行かないかなあ。それが前提でもって、話はしまっっちゃってるからねえ。

中村 そうなんですよ。で、それからなんですけれど、で、1958年の指導要領が出て、先生はその時、[全国] SLA にもうおられて、で、その外から見ていて、指導要領が出た時の、危機意識っていうのは、あったんですか？

芦谷氏 ないですね、それは。私はそれは、系統学習っていうのは、それはもう少し考えた方がいいって思ってたから。

中村 ああそうか。え、それはどういうことですか？新教育の、限界とかっていうのを、先生ご自身が感じられていた？あの経験主義の、たとえば何々ごっこみたいなものをやっていたと言います。そういうのに対する・・・？

芦谷氏 そうそう。だからその経験主義みたいなものはね、やっぱり全体として構成しにくいわけだからさ。そういうのを元にして、ここに原理とか基本的なものを求めてやって行くっていうのは、非常にやりにくいっていうことは、あったと思うんだよね。だから経験主義は経験だけでもって、目的がわからなくて、なにかして終っちゃってるのが多い。だから系統学習っていうのは、一応はっきり・・・それなりに目的っていうものがあるって、それで、やっていくわけだから。その代わり、その体系っていうのは、やっぱり子どもの発達に即していて、子どもがその中でもって自主的に研究していくときに、まあ目的とは違うものが出てくるかもしれないけどね。そういうことで、学習の幅が広がっていくと・・・。そういうところに関わるのが図書館だと思ったし。

だいたいそれ以前だってさ、まあそういうやり方が取られていたわけだよ。図書館を使うにしても。1949年に白鷗高校で私がアルバイトをやっている時に、白鷗高校だって、普通に机を並べた普通の教室で・・・机を合わせてなんかやってるわけじゃないんだからさ。普通の授業をやっているわけでしょ？それでね、生徒は厚い教科書持っているわけね。それで自主学习を進める。たとえば中国の古代思想について調べて来るんだっていうグループがあると、生徒の方は、あなたは孔子で、誰は孟子で、って皆分担しちゃうわけだよ。それで調べてる。ところが教科書が厚くっていろいろ書かれている。調べろって言ったって何をどういう風に調べたらいいかわからない。それで図書館に来るわけだからさ。何にもわからないわけだよ。授業が始まると、先生は椅子持って後ろに行っちゃってさ、生徒に発表させてるわけだよ。

中村 ああ、はい。

芦谷氏 で、白鷗高校あたりは、優秀な生徒が多いからさ、まあそれなりの

ことはやってたわけだけど。で、私は中学校へ行って、そういうようなことを真似して、やっぱりやったわけね。でも、それはやっぱり教科書があるから、経験主義だって言ったって、そんな授業じゃなくて、実際には系統学習に近いような形の中で、資料を使ってたわけだよ。教科書の、地理なら地理っていうものがあるって、それを学習するのに、幅を広げて行く、新しい分野を入れていくっていうそういうことをやっていたわけだよ。だから経験主義の授業をそのまま展開してたっていうのは、私はその戦後の早い時期、あるいは一部の学校じゃなくなっている気がするわけね。教科書があったわけだし、それで、教科書で授業をやるっていうのは、私なんかが教員になったころはもうそういうのがあたり前の体制だったし。それから、資料を使った学習っていうのは、まあやってる人は結構いたけど、けどそれは今言ったような範囲で。だから、指導要領が変わったって、まあやってる内容がそれほど変わるわけじゃない、という風に思ったわけね。

だけれども、指導要領の系統学習っていうのは、そうじゃないんだと。知識をね、学問体系に沿って教え込むのだという立場が出てきたことについては、非常に困ったもんだと思ったし、指導要領の改訂は、その時が一番大きいという風には思いますよ。だけれども、本来の、図書館の資料を使った指導というのは、そういう系統学習の発想の中で、消えて行くものじゃないんじゃないか、続けていかなければいけないものじゃないかっていう考えは、あったよね。だから、そういう意味では、今危機だという風には思わなかった。今までやってたことがそのまま続いているんじゃないかっていう思いだから。だから、岡山あたりでたくさん発表したって、だいたいそれに近いようなものが多いんだよ。

中村 じゃあ、指導要領じゃないんですね、先生のお考えでは。学校図書館が、その頃から、その頃というか、やっぱり盛り上がったものの、本当に定着しなかった。

芦谷氏 本格的に定着しなかった。しなくなってきたわけだよ。

中村 それは必ずしも指導要領のせいではなくて、もっと違う・・・

芦谷氏 だからその指導要領っていうのは、なんていうのかな、基本だしね。

特に高等学校なんかでは、見やしないもん、先生は。で、当時は小・中学校も、そんなに強制力があつたわけじゃないからね。まあ今は一字一句についてなんか言うけれどもね。その頃はそれほどでもなかつたわけですね。だから、私は、指導要領が改訂されたといつたって、それはやっぱり現場の状態にある程度即しているんだし、我々としてはやっぱりそれに対して、こういう風に考えて行くべきだというものを持っていくべきだと思うんだよね。私が勤めていた現場での経験の時代っていうのは、そういうものに束縛されない生活でやってきたわけだから。だから、指導要領の改訂だとかそういうものが出てきても、そこまで考えなくたっていいじゃないかとかそういう風にね、思いますよ。だから、総合学習なんかだつて、当然そういうのは上手くやって行くべきで。上手くやつて行かなくちゃと思うよ。あれ、教科書無いんだから、それこそ系統がきちんとしてなくちゃ、扱いは上手く行かないもん。それは教え込みじゃなくてね、やっぱり子どもが自発的に学習するっていうのは、ひとつの体系だったものがあつて、その中のどこを誰が受け持つかについてということじゃなくちゃ、成果はあげられないよね。機械やなんかも入ってくるし、複雑なんだから、それは。だからそういう意味での系統学習っていうのは、当然だと思うし。ただ文部省がどう考えてるかっていうのは、よくわからないんだよ。

中村 それは別なんですね。

芦谷氏 知らないんだよ、それは。知らないって、あんまり詮索したことも無いからね。けれども、知識を教えればいいんだつてそういう言い方はしないと思うよ、それは。

中村 うーん、そうか。案外、33年の指導要領は、転機というわけではないのかもしれないね。

芦谷氏 あの、現場ではね。ただ学習指導の政策としてはね、転機だつたと思うね、非常にね。だつて今まで参考資料だつた指導要領が、基準になつたわけだから。道徳教育なんか入つて来たわけだし、そしてしかも今で言う経験学習っていうのを否定した形で、系統学習っていうものが出てくるんだから。だからそういう意味では非常に大きな改訂だと思うけれども、現場の方は、それに近い状況になつてきていたから。まあ、一方ではまあ

それなりに自主学習をとり入れた系統学習にあたるものやってるけれどね。大会なんかの発表を見ると。

中村 それは先生が仰ってる、何かで仰ってた、現場では、学校図書館を使った学習っていうのは、やってみて、骨折り損だっていう・・・すごく骨折りだっていうことがわかって、やる先生は居なくなったっていうようなことを書いておられますけれども、それ・・・⁽¹⁶⁾

芦谷氏 それはあると思う。要するに、それは、教員の方に構想がきちんとしてないから。だけれども、結局は、教師が教えれば楽だからさ・・・。教えるだけならば。だからどうしてもそっちに流れて行っちゃうっていうのはあると思うんだよ。資料は十分に無いわけだしさ、やらせたかったって。それから、資料を探してくるって言ったって、どうやって探していいかわかんないわけだしね。だけれども、まあ上手くやった人もいるわけだよ、それを。

中村 そしてそれをいまだにやってる人もいると・・・。

芦谷氏 うん、いるわけだよ。調べると結構・・・。大会なんかの発表を見ると。それなりにやってる人はいるわなあ。

中村 先生が[中学校を]お辞めになってSLAに入られた頃、1960年位って、資料センター論、教材センター論って出てきますよね。で、他には読書センター論。こういう各種センター論っていうのは、どういったところから出てきたんですか？

芦谷氏 それは文部省が言ったんだろうねえ。だと思っよ。それは、現場でも言ったかもしれないけれども、手引書がいろいろそういうものを書いてるわけでしょ。『[学校図書館における] 図書以外の資料の整理と利用』⁽¹⁷⁾ なんか、資料センター論という言葉を使ってるんじゃないかと思うけどね。

中村 ということは、深川先生っていうことですか。

芦谷氏 ということだね、当時のあれはね。

中村 深川先生って、今お聞きできないから、先生にうかがうのですけれど。深川先生っていうのは、学校図書館を、そういう系統学習的なものが一般的になった教育界に、どうやって生き残らせるかっていう為に、いろいろこういうセンター論を出してみたりして、努力されていたっていう感じな

んですか？

芦谷氏 うーんどうなんだろうねえ。これは鈴木 [英二] 先生の方が詳しいと思うけどね。鈴木先生もそんなに接触してるわけじゃないけれど、僕よりは、多いんじゃないかっていう気がするけどね。だけどもあ、本当のところはなかなかわからないなあ、そのところは。どの位まで、そういうつもりでやったのかね。その頃 [東京] 学芸大学に行っちゃったわけだからね。それまでの熱意があったかどうかっていうのは、ちょっともう……。まあ担当者ではあったわけだけれど。

中村 だってそういうのっていうのは、現場では影響力無かったわけですよ、実際。

芦谷氏 うん、それほどねえ影響力無かったと思う。何とか論って言ったって、それほどねえ実態は変わらないわけだよ。言葉だけ、変わってて。図書館情報大 [学] にいた竹内 [愨] 先生がよくその話をするけれども (笑)。何とかセンター論っていうのはあるけれども、実態が全然変わってないじゃないかって。

中村 でも、新しいのを次々出していったっていうのは、何なんだろうっていうのが、私の中にはあるんですけど。紙の上では。

芦谷氏 だからまあそう。紙の上だけだよな。

中村 でも、誰かが意図して、それが起爆剤になって、何か変わったらいいなってあったのかなって思ったりもするんですけども。

芦谷氏 そりゃあまあ、深川さんなんていうのは、何ていうのかなあ。さっきも言ったように、百科事典を作るような子どもをなんていうような、ある意味では現場に即してないって言ったら即してないんだけど、そういう理想主義的なところがあったから、ね。それに、本自体にね、件名を付けておくとね、利用するのに便利だなんて提案したことがある。そりゃあ本に件名が付いているのもまったく意味がないわけでもないかもしれないけれど、本には目次なんかもあるし、本に到達するまでに件名が必要なんであってさ。やっぱり何かそういったような、現実と遊離しているようなところもあるんじゃないかね。

中村 じゃあ、現場にいる側にしたら、つながっていかないような……

芦谷氏 うん、そういう面はかなりあったと思うよ。その非常に、信奉している人もいたけどね。

中村 では、深川先生の後任だった井澤〔純〕先生とは、芦谷先生は関わりがありましたか。

芦谷氏 まあ井澤先生なんかも関わりが無いことはないけれども、佐野〔友彦〕さんなんかわりとつながりが深かったけれど、僕はまああんまりだよ。文部省との関わりなんかも、直接あんまりなかったからね。ただ、手引書とか作るなんて言う時は、一緒にやったりしたけれど。井澤さんという人は、いわゆる戦前の教養主義の最後の人だけれど、非常におもしろい人だよ。初代の〔愛知県立豊橋東高校の〕司書教諭だった人だけれども。出してる、『読書教育原論』⁽¹⁸⁾なんていうのは、なんか難しい本だけれども……。いわゆる行政官としては、ちょっと外れた感じの人だよ。あの人は。だから、井澤さんは相当一生懸命やった人だよ。あの人はあんまり夢みたいなことは考えない人だった。まあ現場の人とも議論したしね。討論だのなんか、随分やったりしてた。

中村 教養主義的っていうのは、つまり、学校図書館でイメージするのは、教養の育成だっていうことですか。

芦谷氏 まあそういう風な一面もあるっていうことだね。東大の倫理（東京大学文学部倫理学科）の出身で、やっぱり自分自身がそういう側面もってる人だよ。だけれども、学習指導に資料を活用するとか、一方利用指導のことも、考えたりしてたけど。学校図書館は、学習指導のセンターだなんて言っただって、貸本屋じゃないか、なんてよく高等学校の図書館のこと、言ったりもしててたけど。

中村 そうか、じゃあ先生は文部省系の信奉者じゃないとしたら、文部省系の信奉者っていうのはいるんですか（笑）。

芦谷氏 知らない、そりゃあ別に信奉者なんていうのは（笑）。

中村 まあ、じゃあ、芦谷先生は、鳥生先生とかに影響を受けたっていう。

芦谷氏 影響を受けてるね。中学校の時から影響を受けているし。それからそのあと知り合った人たちの影響もね、それなりに受けているよね。文部省の人たちだってそういう意味じゃ、それなりにやっぱり影響は受けてる

と思うよ。まあそういう人がいて、私はここまで生きてきているっていう
思いは、強いよねえ。専門分野でない人の影響も、いろいろあるけれども。

中村 アメリカはどうですか？

芦谷氏 アメリカの影響は無いや、私は（笑）。

中村 ああ。そうですか？

芦谷氏 直接は。

中村 アメリカのものを読んで、これにこう・・・それこそ信奉して・・・っ
ていうようなことも無いですか？

芦谷氏 それは無いですね。私は。

中村 ただ、日本の学校図書館学って、アメリカの影響が・・・

芦谷氏 ありますよね、それは。裏付けとしてはね。それはありますね。

中村 ただ、ご自分自身は、あまり実感されてない。

芦谷氏 実感してないですね。ま、少しは読んだけどね、そりゃあ。

中村 読んでも、訴えてこないですね。

芦谷氏 うーん。僕はやっぱり、ファーゴ (Lucile F. Fargo) の本なんか
も読んだけどね。うーん。具体的な実践や何かのね、優れたものを見たり、
あるいは利用指導の計画なんかをいろいろ見ると、確かに、学ぶべきもの
は多いと思うけれども。

中村 結構、アメリカの例を信奉しているような人は多いのではないかと思っ
て。

芦谷氏 それはそれでいいと思うけれども、一面、つながりがどうかと思
うものもあるわね。ものによってはね。

中村 日本の現場とつながらない・・・

芦谷氏 日本の現場との関係のある程度考えて行く必要が・・・。まあ現場
としてはね。研究としてはもちろん、そういうのがあって、いいと思うし。
でも、現場に直接つなげてくっていうと、やっぱりもう少し。教育の制度
が違うんだからね。まあ広報活動やなんかはね、いいと思うけど。工夫し
ていけばできることだからね。

中村 うーん。先生がこの、何度か書いておられると思うんですけども⁽¹⁹⁾。
日本の場合、先に、学校図書館が一応全校に出来てしまって、例えばまず

資料を集めて、それから教科とのつながりを考えると、先に図書館ができて、あとから読書指導の問題を考えるとかいた風にか、ベクトルが逆になってしまっている、それが問題点という風なことを仰っているんですけども。それが日本の学校図書館の戦後の歴史ででしょうか？

芦谷氏 前に全国 SLA の会長やった [東京都立] 両国高校の校長だった福岡 [高] さんなんか、中身はどうするんだっていうような質問をされるって言ってたけど、やっぱり先に図書館ができちゃって、それから後でどうするっていうようなところもあった。今でも、オープンスクールなんかで図書館を作ったような場合、アメリカのすばらしい建物を見てきて、それを取り入れた。だけどどうやってこれからやっていくんだかわからないという例もある。それはまあ物の順序としては逆なんだけれども、それは、現実にはあることはあるよね。その必要とか要求とかいうものがあるって、それから作るんだっていうのは、それがものの順序だと思うけれども。建物ができただけで、わけがわからなくてそれで終わっちゃうっていうんじゃ、それじゃしょうがないけどね。でもそこにそれなりの考えの人がいれば、それはそれでうまく行くっていうことはあり得るだろうと思う。先に作ったっていても、まあ後じゃできないから、出来る時に作るってこともあるだろうと思うけれどね。

たとえば豊島区なんかは区長が熱心で、学校で半分費用を出せば、区で半分出すからって言って、独立の図書館皆つくっちゃったんだからね⁽²⁰⁾。ああいうのなんかはまあそういう風なところがかなりあったと思うんだよね。それはよくやってる学校があったから、そういう発想が出たと思うんだよ。別に区長は自分じゃ学校なんか行ってない、染物の工場か何かやってる人だったけどね。

中村 それ何年頃の話ですか。

芦谷氏 あれは昭和20年代後半だったよね。それでどこの学校にも図書館が出来たわけだよ、それなりの独立の建物が。今はみんな残っていないけれど。

中村 じゃあ日本の、しょうがない。できちゃって今ありますよね、学校図書館が全校に(笑)。今後どういう風にしたらっていうのを、お考えで・・・、

学校図書館の今後っていうのは、どういうふうにお考えですか。まとめていきたいと思うんですが。

芦谷氏 今後の学校図書館っていうのは・・・

中村 どういったアプローチが。

芦谷氏 そうねえ。やっぱりねえ。利用して・・・利用しなくちゃしょうがないからねえ。それは、図書館があるから利用するっていう発想にまたなっちゃうわけだけどね。だけど、全校の教育をどういう風にしてやっていくかっていうことがあってさ。それぞれの教育がさ、その中で図書館がどういう役割を果たすかっていうことを考えていくべき。やっぱり司書教諭が配置されれば、それを考えていくような立場だからね。そういうようなことを考えていく体制作っていくっていう必要があると思うし。それから、すべての学校で図書館が必ずしも中心でなければならぬっていうことは言えない。それは学校によって差があつていい。だけれど、どこの学校でも、その中でもって図書館がどういう風に生かされていくかを考えなければ、やり方っていういろいろあると思うけれども。それにどこの学校にも、資料の活用に関心がある先生がいるはずだから。やっぱりそういう人との結びつきから広がっていくみたいな形の方がいいんじゃないかと思うんだね。やっぱり無理してもしょうがない・・・まあ全部一緒にやるっていうのは、無理な学校も多いと思うんだけどね。だけれども、図書館の方が熱心じゃなくて、周りが熱心な学校もあるんでね。周りの先生の方が熱心で、図書館の方はどうしていいかよくわかんないみたいな。昔からそう思うんだけど、そういうようなのをちゃんとしていかなければ具合が悪いんじゃないかと・・・。黒澤 [浩] 先生は、世田谷の中学校でずっと教員をやっていたけれど、全部の先生の協力で、ブックリストを作った。

中村 ああやっつてらっしゃいますね。本屋さんにも何か関わってもらって・・・

芦谷氏 うん。で、ああいう体制を作ったっていうことね。最初、先生方の協力を得るっていうことはいろいろ大変だったっていうこともある。難しい本をあげてきた先生がいたりね。それもまあ教師教育だからしょうがない。子どもには気の毒だけれども、それはそのまま載せて。一応協力してもらってるから、ってことでおだてて。そうやってだんだん本物にしていっ

たっていう経過があつて。はじめっから目標をもって達成する、っていうようなことじゃなかったわけだよ。でも最後には、全部の教員の協力を得ているわけだからね。だから、そういったようなことを、やっぱり、教科の面でも考えて、図書館の方では協力していくことが、必要だと思うね。

芦谷氏 図書館が、総合学習をてこにして、自主学習を上げてほしい。総合学習じゃなくたって、自主学習にはいろいろあるけれども、技術だとか訓練だとかっていうのが多い。図書館の場合、学習は中身と結びつくことだから。何を勉強するかだよ。それが大事だということは、これは誰も知ってること、思っていることだろうけれどもね。だから、それをまあ上げていって欲しいと思うね。

中村 そして結構、人が配置されるっていうことは重要？

芦谷氏 それは大事だよ。だって人がいなくちゃ動かない。12時間くらいの授業だと、結構・・・

中村 それは先生、やっぱりご自身が、担当授業の少しの減免を受けてやってみて、無理だっていう風に、お感じになられましたか？

芦谷氏 うん、そりゃね、無理だよ。そりゃ12時間だつてやっぱり。僕はね、専任だったらいいなって思ったよ。そう思わない人も多いと思うけれども。僕はやっぱり専任だったら随分できるなって思ったよ。授業が少ないって言ったって、間が1時間くらい空いてたって、何にも出来ないもん。12時間の時は、月曜と土曜に空きを作ってくれたからね、その日は図書館の仕事が出来るっていう。僕は頼んだわけじゃないけど。そうしてくれた。それで、専任だったら、気が楽だつていうことはないけれども、もっとよくできるなという風に思ったけれどもね。

中村 先生はSLAにおられた間っていうのはちょうど、学校図書館法改正運動を何度も何度もやってこれた時代と同じわけですよ。ずっと見てきて、先生は、司書教諭、教諭である人の専任の配置っていうのをお考えになってる？

芦谷氏 司書教諭と学校司書の両方置いた方がいい。で、私がやった時には、校長がPTA雇用で司書を雇ってくれたわけ。最後の2年くらい。だけど、校長が辞める時に、連れて行っちゃったわけ。自分が個人的な形で頼んだ

わけだから。だけど、で、その人は、男だけど、法政[大学]の夜学へ行ってた。1番で卒業して先生になったけど。その人も、授業を、4時間かな、持たせたわけ。英語の授業を持たせたけどね。で、あとは図書館。ところがさ、夜学の授業があるからさ、早く帰っちゃうんだよね。こっちの方も、いろいろあってさ。そういうことになると、なかなか落ち着いて仕事が出来ないっていうことになっちゃう。だからやっぱり専任の人が、落ち着いてやれる状況は欲しいなって思うわね。司書と司書教諭の仕事の関係や分担もあるわけだし。

中村 そうですよ。

芦谷氏 やっぱり司書教諭っていうのは、法律に決まってることだし、それから学校司書の方は現実に存在するわけだからね。観念的な考え方としては、まあ議論あると思うけれども、やっぱり現実の問題として、両方あるものを、生かしてやっていかないと。現実に今、理想の図書館なんていうことを言えばね、どこでもできるわけじゃないけどね。理想の図書館じゃなかったって、2人くらい専任がいたって、それほど十分なことができるわけじゃないと思うんだよね。僕なんかは半端な形でやってきたから、たいしたこと出来ないし、また図書館を利用する学習もそんなに盛んだったわけじゃないから。それでも結構それなりにやっていたね。図書委員会の活動もあったし。展示会やったり、何か催しやったり。新聞だって、全員に配るほど作ってなかったけど、作ったり。いろいろやってたわけだから。そういうPR、広報活動。本の利用について、僕なんか教室へ行って、図書館に対する要望を聞いたこともあったし。そういうようなことをやってると、いくらでもあるわけだよ。

中村 うーん、難しいですよ、人も。先生のように、自分で考えて専任になるのじゃなくて、制度として人を先においちゃったら、じゃあその人になにをやらせる？っていう、それを考えるって言う順序になりかねない。

芦谷氏 うーん、だけどそれは、何をやらせるかは一応決まってるわけだよ、もう今はね。内容は、一応あることはあるわけ。ただその人がわかんないってことはあるかもしれないけど。今ね、ちゃんとしたしたベテランが配置されればいいけども、現実問題ってのはまた別だからね。そこのところは

ね。

中村 今ある程度、実践も研究も積み重ねられてきていて、司書が配置されたらこれをやってもらって、司書教諭が配置されたらこれをやってもらってっていうのが、ある程度、あるとして。でも、学校図書館史っていうもので戦後を見た場合は、やっぱり学校図書館の研究とか、セオリーとか、フィロソフィーとかが無くて、で、先に物が与えられちゃって、それで後からどうしようっていう風に、順番が。

芦谷氏 うん、まあフィロソフィーはあんまりないんだけどもさあ、順番も、先に物がというところも多かったと思うけど、全部がそうだったっていうわけじゃないよね、必ずしも。だけれども、フィロソフィーはあんまり、無いんだよ。教育基本法の施行規則みたいなことが、出発点になってるんでね。学校図書館は手段だからねえ、教育のための。だから、学習論がきちんとしないとイケないな、っていう気はするよね。

中村 方法論ですか？

芦谷氏 学習論。だから方法も含めて、それと結びつかなかったら……。だから、司書教諭の科目で、そういう内容を扱う利用指導を中心としたようなものがあるけれども。今、教科書見ても、これで十分かなっていう気はするけどね。

中村 そうですか、十分かな？ってどういう意味ですか。

芦谷氏 だから、その理論っていうか。

中村 土台が？

芦谷氏 だから方法論も含めてだけれどね。まあ書ききれないっていうこともあるけれども、一冊の本で。そんなことを思います。

鈴木英二氏へのインタビュー記録

インタビュー実施日：1999（平成11）年12月13日

鈴木氏略歴：1921（大正10）年生れ；東京高等師範学校を卒業後、1946（昭和21）年に千葉県立船橋中学校教諭となった。1951（昭和26）年に文部省図書館職員養成所を卒業、1955（昭和30）年から全国学校図書館協議会に移っ

た。そして、1965（昭和40）年から興風会図書館長。1982（昭和57）年、千葉経済短期大学教授となった。⁽²¹⁾

中村 まず、失礼なんですけれども、ご経歴を確認させて頂きたいのですが、先生は、戦後すぐの頃に、高等師範学校を卒業されて、新制の船橋中の教員になられたということですか？

鈴木氏 旧制の船橋中学です。

中村 そうですか。

鈴木氏 県立の。旧制の県立船橋中学校。で、学制改革で、横滑りして、[千葉県立船橋]高等学校になった。

中村 じゃあ本当に戦後すぐに卒業されたんですよね。

鈴木氏 昭和20年にね、45年に戦争が終わったでしょ？で、私はねえ、学生の、高等師範学校の学生時代に、現役召集といって召集令状を受けて、で入隊したんですよ。それが昭和20年で、で、12月じゃなくて、終戦の年の8月31日に軍の学校から自宅へ帰ったんですよ。それで復学をするはずだったのですけれども、私は途中で召集を受けて軍隊へ入ったので、最低限の在学期間が無かったんですよね。それで、再教育なんかを受けたりして、もうひとつ、軍の学校を出る時に、陸軍の軍曹という階層に、まあ士官ですよ、に任官しましたんです。軍曹に任ず、ってそれまでは予備学生だったんですけどね。それで、職業軍人とみなされて、で、教員適格審査っていうのを受けることになったんです。

中村 ああ、はい。はじめてそういう方に会いました。

鈴木氏 うん。で、軍国主義じゃないとか、そういうことを審査するのが、県にできて、そこの方に審査にかけられて・・・といったことがあってね、実際に教壇に立ったのが、21年の5月末日・・・の辞令だったのかな？だけれども実際に船高の、船橋中学の教壇に立ったのは、夏休みあけの9月1日だったと思うんですけどもね。ですから、1年じゃなくて、半年くらい・・・

中村 ブランクが。

鈴木氏 ブランクがあったのですけれどもね。実際は9月から県立船橋中学

の、教員になったと。国語科の教員だったんですね。それが出発なんですよ。

中村 で、その後、図書館職員養成所に入られたというのは、1949年とか、そのくらいですか？

鈴木氏 うーん、前にあなたが手紙をくれた時に、手紙の中に、学校図書館に関わりを持つようになった契機というか、そういうところを聞きたいと書いてあったので……。その県立の中学に入って……。と、そのあたりを話すとね。国語科の教師として、教壇に立ったと。で、その時に、国語科の主任の先生が、新任の国語の先生は、うちの学校では、図書係をやるきまりだと、内規だと。というんで、否応無しに、校務分掌の図書係を命ぜられた訳です。で、戦前の中等学校にはですね、だいたい職員室の一隅に、だいたい7、800冊くらいの、いわゆる教師用の参考書が置いてあったものなんですね。国語科で言えば、徒然草だとか枕草子だとかそういったものの注釈書とかね、教授法の本だとかね、そういったものが置いてあるのが、何処の学校でもそうだったと思うんです。で、その管理、というのだったんです。図書係というのは。子どもとの関係はまったく無かったわけですからね。

中村 はい。

鈴木氏 ところが、戦後の私が赴任した中学では、熱心な生徒がいてね、自分たちが読む本も集めて欲しいと。で、生徒会というのができてきますけれどもね、その中にいろいろな委員会だとか部ができる。その中で、図書館委員会、図書委員会だな。というものが設けられて。生徒会の予算の中で、図書購入費を若干なりと獲得して、自分たちの読みたい本を集めるというのが出てきたわけです。で、本が集まってくれば、これは教師用の本とは別ですけどもね、置く場所が必要になってきますよね。で、まあその頃、今でこそ千葉県立船橋高校っていうのは、千葉の第一高校、第一高等学校と比べても、甲乙つかずという受験校なんですよ。ところが当時はねえ、私から市立、市立から県立と移った、施設も設備も相当劣ったねえ、劣ったなんていうと怒られるかな。整備の整わない学校だったわけで、教室も足りない。その中で本をどこへ置くかと、いうことでね、校舎の中を……

ある時期には階段の、その、何ていうの？

中村 踊り場ですか？

鈴木氏 うん、踊り場。踊り場へその本棚を並べてみたりだとか、理科研究室、実験室の一隅に置いたりといったような、まあさすらいの旅路とか言ったけれどもねえ、我々は（笑）。そういう苦労があったということ。もうひとつは、100冊でも200冊でもまあ集まれば、どう並べるかっていう問題が出ますよね。つまり分類の問題ですよね。で、自分たちでじゃあ分類を・・・分類表を作ろうと。そのころ分類表なんていう言葉も聞いていなかったんですけれどね。とにかく並べなきゃならない、並べるのには何かの順序を付けて、並べるため記号が必要だと。で、教員室にあった本の並べ方は、教科別になっているわけです、当然ね。国語科の参考書、理科の参考書っていう風に。で、教師用の方は、私たちの学校では、記号も使ってなかったですねえ。修身だとか、国語だとか、ラベルに書いて、で、修身なら修身、歴史なら歴史の本ってまとめてあるっていうだけだったんですけれども、子ども用、生徒のための本はそれではとてもやりきれないということで、それを記号化を考えてみたり、表をいろいろ作っていたんですけれども。ところがねえ、県の教育委員会の方、その頃教育委員会って言う制度だったのかどっちが先だったのかあれですけれども、県の教育・・・

中村 担当の・・・

鈴木氏 うん、担当の方は、学校図書館について、ほとんど、何もしていなかったんですよね。それで、[千葉] 県立中央図書館に廿日出 [逸暁] という・・・はつかってというのは漢字の廿日ですね、廿日、出る。そのへんでも名前が出てたと思うんですけれども・・・

中村 はい、お名前聞いたことがあります。

鈴木氏 うん、その人がねえ、学校図書館も含めて、いろいろと指導していたんですよね。で、中央図書館の主催で、学校図書館の係に声をかけて、図書館はこういう風に運営するんだと、したらいんだという、指導をしてくれたんです。そういう講習会をね、夏休みに設けてくれた。で、私は、たまたま国語科の教師で、図書係を命じられていた。並べ方、分類について苦労していた。で、あんまり夏休みにね、講習会に出るのは気が進まな

かったのだけれども、まあ、学校の方から命令で、勉強して来いと。まあ命令で受けたので（笑）、いやいやながらね、その県立中央図書館の大会議室で開かれた講習会で、一番後ろの方で、義務的に聞いていたんですけれどもね。で、その時の講師がね、何人かの先生がいたけれども、加藤宗厚さんが、分類の話をしてくれたんですね。わら半紙一枚に、シンプルな表を、抜粋した分類表をくれて。で、こういう分類表があつて、分類表によって分類するんだと。そういう話があつたんです。私は問題意識を持ってたもんですから、それから熱心に真面目に最後まで話しを聞いたんですけれどもね。これがあればじゃあ子どもの本も分類が簡単だと、いうんで、夏休み中だったんだけれども学校へ出て、で、そのまず教師用の本から分類してみようというんでやってみたんです。ところがわからないんですよ、加藤先生の話聞いて、その分類表をもらって、さあ分類してみろ、してみようと思つても。何処に入れていいかわからない本はたくさんあるし。

中村 ああはい。

鈴木氏 それで、困つて、で、廿日出先生のところへ行つて、せっかく講習会を開いてもらつて勉強したんだけれども、わからないと、実際にやってみないと、わからないもんだと思うから、図書館の専門家を派遣してくれと、ここまで責任を持ってもらわないと困る、なんてね、大きなことを館長に言つたら、2人のね、[図書館職員]養成所の卒業生の専任の司書を、回してくれたんです。で、2日間だったかなあ、1日だったかなあ。校長室で、職員用の本を、校長室へ運び込んで、それで分類表に照らし合わせて、その時NDCの第4版かな、まだ薄一っぺらな分類表ですけどもね、それを持ってきて、NDC持ってきて……。くわえタバコでね、ぱっぱっぱっ、やっちゃうわけですよ。で、700、800冊あつたと思う本を、あつという間に片付けちゃつたんですけどもね。それを私は見えて、で、どうしてそういう勉強をするんだと、どこで勉強するんだって聞いたら、養成所があるつて。で、私もそこへ行つて勉強してみようかなあつて言つたら、先生も随分物好きですねえ、つて言われたんですけれどもね（笑）。

中村 どういう意味でしょう（笑）。

鈴木氏 それで、養成所へ、入って勉強しようと。これ中学校のねえ、その頃高校になってたかな？教員ですからねえ。まあ上野へ通うわけには行かないし。それで教育委員会へ行って。教育長が師範学校の恩師だったものですからね、その養成所で勉強したいから、夜の定時制の方へ回してくれないませんか、と頼んだんです。このバカ者がって怒られましてねえ。そんなことをいちいち俺のどこへ言って来るんじゃないと。あの頃あの先生は指導課長だったかなあ。で、そんなことを私のところに直接言ってくるバカ者がいるか、って、そういうのは校長にちゃんと話を通すんだって言われてね。で、校長に言ったのか言わなかったのか覚えていないけれども、そしたら、年度末の人事で、定時制に行けという辞令をもらったんですよ。それで2年間上野〔の図書館職員養成所〕へ通ったんですけれどね。

中村 定時制の船橋・・・

鈴木氏 そうそう同じ学校に定時制が置いてあったんで。それで・・・

中村 すごい。両方行ったんですね。

鈴木氏 ところが、養成所には試験があるっていうんでね、入学試験が勿論あるはずで。それで私は、戦争中ですから英語は全然勉強していないしね、敵国語だったから。で、私は高等師範では中国語を専攻したんですよ、そんな関係もあってね、英語はもう全然勉強していなかったからね。で、試験はどうてい、とても通るはずはないと。それでねえ、文部省のねえ、初等中等教育局長かなあ、えー、こういうことで養成所へ入りたいのだけれども、試験がおぼつかないと。英語は合格点とれる自信がないと、だけれども勉強したいから、なんとか入れさせて、入れてくれないかと言ったら、バカモンとは言わなかったけれどもね。直接そこへもっていったんでね。というのもどこの管轄かもよく知らなかったこともあるんだろうねえ。そうしたら、よくわかったと、それだったら、あれは上野の帝国図書館の管轄だから、上野の〔国立国会〕図書館に加藤〔宗厚〕君がいるから、加藤君に頼んでみなさいと言われて。で、上野の加藤さんのところへ行ってみたら、講習受けた加藤先生ですからねえ。で、加藤先生も勿論即答はくれなかったけれども、まあまあとにかく試験を受けてみなさい、その上で決めましようと言われて。で、試験受けたら、案の定、三浦按針の名前、ロー

マ字になっているのわからなくてねえ（笑）。そうしたら、発表の時に、試験の時だったか、その中学校で子どもの図書室を作った、生徒用の図書室を作った、そのリーダー格をやっていたのが、名前出していいだろう、鷺谷っていうね。鳥の鷺、それに谷。その鷺谷 [昂] 君がいましてねえ。試験場だったよなあ。で、休み時間だったかなあ。で、なんで先生がこんなところにいるんですかってね。俺も、何でおまえがこんなところにいるんだって言ったら、いや、私は受験に来ただけけれども、先生なんでこんなところにいるんですかっていうから、いや俺も受験に来ただって言ってね。で、びっくりして、あれしたんですけれども。どっちも入ったんですよ。

中村 その鷺谷氏っていうのは、先生の教え子・・・

鈴木氏 そう、だから中学校の5年生の時の。

中村 中学校で教えてたんですね。で、一緒に入って。

鈴木氏 そう一緒に入ってねえ。で、彼は私のことを先生先生って言うものだから、養成所の同期が皆、先生先生って。広島的高等師範卒業して、東大の司書官なんかをやったのも、僕らの同期にいるんだけれどもね、それも、広島 [高等] 師範学校を出て、高師を出て、で養成所へ入って来たなんてのもあるんですけれどもね。で、そういうのは何人かいたもので。で、まあそういうのは先生先生って言われてたんですけれども。で、1年経ったときに、鷺谷君は [東京] 学芸大学の試験に合格した、先生どうしようか、続けた方がいいのか。あの頃養成所は2年だったもんですからね。それとも、大学の方へ行った方がいいのかって相談を受けてね。それは、やっぱり大学を出て行ったほうがいいだろうと。図書館そのものは、なんていうのかなあ。図書館そのものを専門とするよりも、それぞれの専門があった上で図書館学勉強するのが筋じゃないか、というような話をした記憶があるんですけれどもね。で、その鷺谷君っていうのは、今も活躍してますよ。

中村 今はどこにいらっしゃるんですか？

鈴木氏 うーん、もう今は定年しちゃって、70 [才] 近いんだらうから。もうやっぱり。

中村 ああ。公共図書館界ですか？学校図書館界ですか？

鈴木氏 いや、ずっと学校の先生やって、厚生省の推薦図書制度 [筆者注：

旧・厚生省中央児童福祉審議会による児童文化財の推薦制度のことか]だったかな、ありますよね。あっちの方の委員、今でもやってるんじゃないかな。

中村 この、県の教育委員会が開いた、廿日出氏が開いた講習会っていうのは、いつの話ですか？

鈴木氏 さてねえ、いつだったろうねえ。調べれば・・・調べても分らないかなあ。22、3年頃じゃないかなあ。

中村 1947（昭和22）年頃という感じですか？じゃあ、もう次の年には入ってらしたんですね。

鈴木氏 うん、養成所を出たのはねえ、新2期っていうあれなんだよな。

中村 昭和26年卒って書いてあるんですけども。この日外〔アソシエーツの「作家・執筆者人物ファイル」の情報〕には。だから、1951年・・・。

鈴木氏 養成所の卒業？

中村 はい。ご卒業が。

鈴木氏 24年に入っただけか。26年っていうと。

中村 じゃあ次の年くらいには養成所にいらしたんですねえ。で、この先生が一番はじめに学校で図書館をはじめられた時っていうのは、『[学校図書館の]手引』とか、すぐ出ましたよね。先生がその講習会に行かれる頃には。

鈴木氏 『[学校図書館の]手引』は・・・

中村 『学校図書館の手引』って48年ですよねえ。

鈴木氏 うん。『[学校図書館の]手引』は23年の12月ですよねえ。23年の12月のぎりぎりになってね、出たんですよ、これ。

中村 じゃあその講習会は『手引』より先ですか？だとしたらかなり先駆的な取り組みですよねえ。

鈴木氏 『[学校図書館の]手引』・・・を使ってたろうなあ。早かったですよ。

中村 『[学校図書館の]手引』はご覧になってましたか？現場にいらして。

鈴木氏 あなた見たことある？

中村 はい。

鈴木氏 これだよ。

中村 それ先生のものですか？どうやって入手されましたか？

鈴木氏 だから僕は、千葉県は鴨川でやりましたからねえ。

中村 鴨川にいらしゃいましたか？

鈴木氏 勿論行ってます。いやー、でも、前後、どっちが遅いか。とんとんくらいのもんじゃないかなあ。

中村 で、もしかすると、『[学校図書館の] 手引』が出た影響で、教育委員会がやったっていう可能性もありますよねえ、この廿日出氏の講習会。

鈴木氏 いや。

中村 廿日出氏の方が早い？

鈴木氏 廿日出さんの方が早かったと思いますよ。

中村 へえ。どういう経緯なのでしょう。ご存知ないですよね？

鈴木氏 いや、廿日出さんのあれでしょう。なんていうか、図書館に対する先見の明というところでしょうねえ。で、ねえ、学校図書館運動の初期のことを見るとねえ。公共図書館の館長さんたちが、リーダーシップを取って、学校図書館の組織を作ったり、あるいは指導をしたり、という地域がいくつかあるんですよ。

中村 大阪とかもそうですよねえ。

鈴木氏 そう、千葉県がそうですし、長野がそうですしね。長野の叶沢〔清介〕という館長さんは。あの一。

中村 読書運動もやってらした方ですよ。

鈴木氏 うん、読書運動もやってるし、日〔本〕図〔書館〕協〔会〕の事務局長もしてますよね。今の事務局長の前は叶沢さん。叶沢さんは、長野の県立図書館で、文庫。母親文庫だったかな。読書運動をやってるでしょ。で、廿日出さんもね。あの方はドイツで図書館を勉強してきた人なんですけれども。ドイツから帰ってきて……。何て言ったかなあ。アメリカ文化センター一式のものが日本にあったんだよなあ⁽²²⁾。

中村 CIE 図書館ですか？

鈴木氏 違う違う違う。それは戦後のことで。戦前からね、そこへ勤めて。それは資料なんかを見ればいくらでもありますけれどもね。それで、千葉

県の県立図書館の初代専任館長として、その東京の半官半民のなんかだったと思うんだけど、そこから、県立図書館長として、県に迎えられたんですよね。それがね、29歳っていうはずだったなあ。それで、戦後の定年まで、県立中央図書館の館長をやっていたんですよ。で、そこから、戦後の国立国会図書館の連絡部長に転任になって。で、連絡部長を、さらに定年で辞めて。それから実践女子大学の、図書館学の教授になっていたんでしょう。

中村 ああそうなんですか。

鈴木氏 実践女子大でしたよね、確か。実践女子大の前に、どこだったか。ちょっとあれですけどね。それで、千葉県下の中央図書館の館長としてね、県内の図書館を束ねていた人なんですよ。で、学校図書館の……。戦後になって学校図書館の……。県があんまり面倒を見ないし、県の側に言わせれば、廿日出君がみんなやってるから、任せておこうっていうことだったかもしれないけれどね。それで、戦後のしばらくの間。[19] 49年にね。確か49年に図書館法ができるのだけれども [筆者注：図書館法制定は1950年]、その49年か50年に千葉県の学校図書館協議会っていうのが生まれるんです。長野もそんなもんなんですけどね。どっちも、学校図書館協議会の結成っていうのは、一番終わりの方くらいの遅さなんですよ。というのは、千葉県の場合で言えば、千葉県学校図書館協議会じゃなくて、千葉県図書館事業振興会⁽²³⁾ っていう組織があって、でこれは公共図書館と学校図書館が一緒になった組織なんです。

中村 戦前からあったんですか。

鈴木氏 いや戦後ですけどもね。だけれども、あの頃の図書館は、戦前に出来た図書館で、館長室もこのくらいの部屋しかなかったんですけども。図書館事業振興会の活動の中心、中身はほとんどが学校図書館関係のものがほとんどだったんですよ。学校図書館の指導・育成に、廿日出さんが、ほとんど全力投球してたんですよ。廿日出さんを囲んでいろんな話をしたり、計画を練ったりしたんですよ。だから図書館事業振興会で、僕らも終わりの頃は、講習会の講師に入れられたり、成田山で宿泊研修会をやったりっていうことがあったんですけどもね。

中村 今でもあるんですか？その振興会っていうのは。

鈴木氏 いや、それがその学校図書館法ができて。昭和29年に、今度は県の教育委員会も黙ってみている訳には行かない訳ですよ。筋から言っただけで、中央図書館と学校図書館との考えというのは……。学校図書館は学校教育の問題だから。廿日出さんがいつまでもやってる訳には行かないと。で、現場としてもね、県立中央図書館と、それから千葉県図書館事業振興会という名前で文書をもらっても、立場として動けないわけですよ、校長もね。同じ教育委員会の中であっても、所轄が違うじゃないかと。いうことで、結局、図書館事業振興会初期の頃のメンバーと、それで学校図書館法が出来た後の学校図書館関係者の考えとしては、やはり図書館事業振興会とは別に、学校図書館協議会を作るべきだと、いうことで。

中村 できたんですね。

鈴木氏 ええ千葉県 SLA ができるわけです⁽²⁴⁾。これが確か30年の5月頃。ものすごく台風並の雨嵐の日だと思ったなあ。確か、30年だったね。で、長野もやっぱり同じように……。叶沢さんの影響から……。脱却して。長野県学校図書館協議会というのができるんだと思うんだけどね。で、そんなことで、一方、養成所を出てくるとねえ。その広島の高師を出て、養成所を出たのは、京都の府立図書館に整理課長で採用されて。で、私にも、藤田〔善一〕君と一緒に、京都の府立へ来て、で、運用課長っていうのかな、整理課長と……。何て言ったかな、整理技術とそれから奉仕関係の仕事をね、そっちの方をやってくれないかってあの当時の西村〔精一〕って言う館長さんが、わざわざ県立の船橋高まで来て、誘われたんだけどね。私は結婚早々だったしねえ。

中村 で、千葉に残られたんですか。

鈴木氏 まあそれだけじゃなくて、結局、学校図書館のことやりたくて、養成所へ行ったんだから。で、教育委員会にもいろいろ配慮してもらって。だからお礼奉公ということもあるし。チャンスだからというんですぐ京都へ行っちゃうのはまずいんじゃないかっていうんで、それでお断りしたんですけどね。

中村 あ、ちょっと戻りますけれども、廿日出氏がなぜ学校図書館に注目し

たかっていうのは、なんとなくアイディアはありますか。当時の・・・。

鈴木氏 いや、やっぱり館長としてのあれでしょうねえ。学校教育の中における図書館の重要性っていうものを、廿日出さんは廿日出さんなりに考えていたんじゃないのかな。うーん。で、俺が出なければ、学校図書館も軌道に乗らないっていう。ホントに図書館一途の人でしたからね、廿日出さんという人は。まあ、廿日出っていう字。あの当時は千葉県の給与の支給日が二十日だったんで、二十日の日だけは図書館に帰ってくる、出てくる、だから廿日出だ、っていう見方とね、もうひとつ。月の内二十日は外へ出ていると。県内を回って、図書館の指導なんかにあたっていると。読書運動なんかもやりましたしね。月の内二十日は出ているから廿日出だという、口さがないスズメが、言ったもんなんですけれどもね。

中村 へえ。で、鴨川の講習にいらしたっていうのは、それがきっかけで、全国 SLA の方につながっていくんですか。

鈴木氏 うん、まあ一応そういう風に言っていいでしょねえ。

中村 はあ。その場で『学校図書館の手引』を手に入れられて、新しい学校図書館なんかを知るのも、この手引からですか？

鈴木氏 そうですねえ。しかし考えてみると、まったく不勉強でねえ。おそらく全巻をとおして読んでないんじゃないかな。

中村 その伝達講習に出た方って、なかなかお目にかかれないんですけども、その伝達講習の中身とかって、何かしら印象的なものってありますか。

鈴木氏 うーん、中身そのものはねえ。何にも知らないところへ・・・ NDC は知っていたか知らないか、加藤宗厚さんの講習を千葉県の主催のあれで聞いていたかどうか。そのへんもなんかもう記憶が曖昧模糊としているんだけど。うーん、はじめてのものをねえ。講演の中で聞かされてもねえ、よく理解が届かないんだよねえ。だけども、私が興味をもっているのかなあ、分類法のあたり、書き込みもあるから。だけども、今振り返ってみるとねえ、学校図書館の面から・・・まあそれで仕方のないことかもしれないけれど、学校図書館の面からだけしか書いてないんだよ。で、学校図書館っていうのは、元をただせば、アメリカの使節団 [筆者注：米国教育使節団] が来て、そして日本の教育はこうあるべきだというサゼツ

ションをもらう訳ですけれどもねえ。この元はねえ、学校図書館ということも出てくるけれども、教育の改革でしょ。「新教育指針」っていうのが出るんだけど、教育課程とか指導要領とかっていうものは、法的なものが出る前の、いわば後からいろいろな指導要領が改訂されるとかいうのが出てきますけれども、その一番最初の指導要領に相当するのが、その新教育という指針なんですよね。アメリカさんの、おそらく中心になって作られたものだろうと思うんだけど。教育を、皇国教育って言った天皇のためには死ぬんだと、天皇陛下万歳って死ぬんだと、そういう国民を作るための教育から、まっ民主的な教育へ変えていく・・・

中村 はい。

鈴木氏 その指針が、その新教育って言われるもの。新教育っていうものをこう考えていくと。いわゆる教壇に立って、先生が黒板を背にして、50人なら50人の子どもが一斉に、そういう教育から、そうじゃないんだと。それぞれの個性っていうものを大切に、自発的な学習、そういった教育を目指していかなきゃいけないと。そういう教育をするために、学校図書館というものが、アメリカ、欧米の学校では全て必要になってるんだと。そういう意図ではじまった。新教育を、新しい教育に切り替えていくんだという、それが私はねえ、もう少し強調というか、強く出てくればよかったんじゃないかという気が、私はするんですけれどもね。まっこれまた後でも話が出ると思うんだけど。あるいは、ゆとりある教育だとか、っていうことが、その後だんだん言われるようになって、今の教育は抜本的に改革されなければならないって言うんだけど。その改革の方針っていうのは、おそらく昭和20年代に、行なわれてしかるべきだったんじゃないかなあっていう気もするんですけれどもね。まっ僕は途中から抜けちゃうから。大きなことは言えないんだけど。

中村 じゃあその『[学校図書館の]手引』の講習会で印象に残っているのは、どちらかというと元々ご自身が関心のあった、その分類とかの講義の方で、あまりその理念としての、新しい理念の学校図書館っていうのを、ガンとやられたっていう記憶はあまりないんですか。

鈴木氏 それはあまりなかったですねえ。で、あの時はねえ、これは書いた

ものにもあるし、あなたも読んでいると思うけれども、東日本と西日本の東西2つに分けて、この『[学校図書館の]手引』が出来た、その伝達講習・・・俗称なんですけれどね、伝達講習っていうのはが開かれると[筆者注：正式の名称は「学校図書館講習協議会」]。で、千葉県。東日本では千葉県が。これは廿日出さんがやっぱり裏でやってるんですよ。あの呼んでるんですよ。で、廿日出さんっていうのは、もう図書館界、千葉県はおろか、文部省あたりにも鳴り響いていた館長ですから、で、喜んで引き受けてくれるっていうんで、廿日出さんが裏にいるんですけれどね。で、その時に、松尾[弥太郎]さんが動議を出して、で、今後とも研究をしなければならない面が多いんだから、研究組織を皆で作ろうと。その頃東京にもまだ出ていないんですよ。だから、東京をはじめとして、組織を作ろう、研究組織を作ろう、という動議を出して、全会一致でそれが認められる訳です。東日本はこれで話がまとまったけれども、西日本の同士にも声をかける必要があるんじゃないのか、というので、東日本の会場ではこういうことが決議されましたと、西日本さんも同調してくれませんかといった主旨の呼びかけをする訳ですね。で、その伝達に立ったのが、これ、私の記憶で言うと、椎野[正之]さんだったと言うんですね。名前まで出ました？

中村 あ、あのそうですね。尾原さんが、向こうに。

鈴木氏 ええ。尾原[淳夫]さんが向こうですねえ。で、椎野さんが使者に立ったという風に・・・⁽²⁵⁾。僕はまだ鴨川の会の時には会場の一番後ろの方で聞いていた仲間。誰が、あの松尾弥太郎っていうのはどういう人なのか、何も知らない時だったからね。でも、いろいろ後から聞いた記憶だと思っただけけれども、椎野正之君が、正之さんが、僕より先輩だと思っただけけれども、が、向こうで受けて立って、これも詳しいことは知らないけれども、東京と関西のつなぎ役をしたのが尾原淳夫だと、いうことなんですけれどもね。

中村 じゃあ京都の方の会場っていうのは・・・。

鈴木氏 西の方の会場は京都じゃないですよ、天理。

中村 ああそうでした。奈良でした。天理に決まったのは・・・

鈴木氏 そのいきさつは知りません。ただあの、関西の図書館、公共図書館、

大学図書館ひっくるめて、天理はトップのあれですからね。そういうことで白羽の矢が立ったんじゃないのかな。

中村 その講習会は、やはり学校の側に要請されて、行かされて行った感じでしたか。

鈴木氏 そうねえ。そうでも、そうじゃなかったんじゃないかな。

中村 ご自身でどこかで。それともその〔千葉県図書館事業〕振興会経由で。

鈴木氏 図書館事業振興会……。はあまりかんでなかったんじゃないのかな、やっぱり自分で行って見たかったんじゃないのかな。

中村 じゃあ結構宣伝されていたんですね。その講習会があるぞっていうことは。

鈴木氏 いやそれはあの文部省から通知が出て、大学の教授が一人出るとか、指導主事の代表が出るとか、誰が出るとか、割り当てがあったんじゃないのかな、確か。だから、私もそういうのを、学校の組織の中で、校長なり教頭なりから、おまえ出るかと言われたことがあったかもしれないし。あるいはそういう文書が回ってきたのを見て、行かせてくれって願い出たのか……。あまりよくそのへんは覚えていないけれどもね。

中村 希望すれば出れるっていうものだったんですか？

鈴木氏 うん、それはありましたね。

鈴木氏 それ、僕はあの東西のその伝達講習もそうだったけれども……。うーん何年になるかな。私のこの調べたあれによると。初等教育と中等教育のワークショップっていうのが、開かれるんですよ。ワークショップの話、出てこない？

中村 それはIFELとは別ですよ。

鈴木氏 うん、IFELは指導者の方。

中村 はい、もっと下のレベルですか？下っていうか。

鈴木氏 うん、8つのブロックに分けてね。関東地区とかね、関西地区とか、いうことで。ワークショップが……。伝達講習……

中村 それは学校図書館じゃなくて、初等教育と中等教育の。

鈴木氏 そうそう、初等教育・中等教育に分けてね、で分科会がわかれて、で、分科会の中に視聴覚教育分科会とかね。図書館分科会とかっていうのがあつ

たんですよ。これ、教育法、教育指導の問題が中心だったんじゃないのかな。それがねえ宇都宮で開かれたことがあってね、その中で、カリキュラム・エンリッチメントっていう言葉が盛んに言われてね。カリキュラム・エンリッチメント。で、上の人に、エンリッチメントなんて言われたってわからないんですけど、どういうことなんですか、って聞いた。宿でね。夕方雑談の中でね。なんだおまえそんなことも知らないで学校図書館のことやってんのかよ、って言われた覚えがあるんだけどね(笑)。しかし、結局新しい教育っていうのは、日本の教育風土の中じゃ育たないんじゃないのかなあ。

中村 今後もですか(笑)？

鈴木氏 (笑)。まあ、私の持論なんだけれども。

中村 そのお話はじゃあまた後でうかがいたいのですけれども、その鴨川の大会の大会の時には、先生は一番後ろにいらしたとか仰ってましたけれども、松尾氏とかそういった中心の人たちとの会話を交わされるとかは・・・無かった？

鈴木氏 無い、無かった。でね、私がね、SLA と関わりを持つようになったのはね、設立総会の時なんですよ。25年でしょ。25年の2月の末から3月1日にかけて、SLA が、組織が発足するんだけどね。その時にね、総会があって、そこで結成が決議されるんだけどね、その席には私は全然関係ないですよ、やっぱり。

中村 え、そうなんですか。

鈴木氏 うん、それで、その後の3日間のうちの最後の2日間かな、が研究発表になってるんですよ。で、その時に、私がねえ、研究発表をしてるんですよ。

中村 はい、これですよ。 「学校図書館目録編纂上の諸問題」 っていうのですよ(26)。

鈴木氏 そんなの見ました？

中村 なんでそんな、発表されるようになったいきさつとかは。

鈴木氏 うん、それがねえ。やっぱり廿日出さんが・・・。廿日出さんは、その設立総会の時に、千葉県は図書館事業振興会なんですよ。で、代表と

して、廿日出さんが出ているわけです。で、総会に恐らく廿日出さんが出ると思うんです。で、廿日出さんが、おまえ研究発表をやれと。いう風に、確か言われたと思うんです。私がなぜ代表で発表したかと言うと・・・その養成所から帰って、卒業して出ているわけだよな？

中村 まだいらしゃるんじゃないですか。

鈴木氏 まだいるのかな。で、あのさっきの船橋中学の続きだけれども。うーん、午前中、2年間、養成所の課程は2年間だったんだけど、授業はねえ、午前中だけなんですよ、その頃の養成所。で、午後は、食糧事情も悪かったし、アルバイトをやっているのも多かったし、色んなのがあったんじゃないのかな。午前中講義があって、午後はそれぞれ自由、ということ。だから、実質1年間くらいのもんなんだけど、勉強したのは。で、午後は私はそこで弁当を食べて。弁当を食うところなんてなかったんですからね。うちから昼と夜の弁当を持って・・・。家内が百姓娘だったからね、米の方は心配なかったんだけど。で、弁当を2つ持って、上野で昼飯を食って、で、船橋へ帰るんですよ。で、船橋で、午後は図書館運営なんです。図書館の仕事をして、で、夜、夜学の授業を指導して、9時頃うちに帰ると。それ、2年間続けたんですけれどもね。その頃校長が変わるんですよ。山口久太っていう、これはもうオリンピック、東京オリンピックの時も活動したんじゃないのかな。

中村 へえ。

鈴木氏 久太さんでもうなくなっただすけれども。この方がね、校長になって来るんですよ。で、ほらさっき言ったように、本を置くところがなくて、あちこちあちこちしているところへ、来るんですけれどもね。で、その校長さんが、職員会議の時に、何をしたいか、何をすべきか、申し出ると。で、十分考慮するからという話があって。で、僕は早速ね、その校長のところへ行って、これこれこういうことで、本を集めても置く場所がないと、せめて部屋の片隅でもいいから、安住していただける場所を見つけて欲しいと、あるいは作って欲しいと。こういうことを恐る恐る言ったんですよ。山口久太さんは、体育系の先生でね、これは箱根マラソン、今もやっているけれども、あれのアンカーをつとめた、有名な先生なんですよ。で、

教育委員も。公選制の教育委員っていうのが出てくるでしょ。その時に、立候補して、当選している経歴も持っている先生で。で、その先生がね、私のそういう風な申し出に対して、仰ったのは、これからの高等学校の教育というのは、図書館なしでは考えられないと。私はまっさきに図書館を作るつもりだと、と仰ってね。で、早速ですよ。東京にアメリカンスクールが、進駐軍の師弟を、勉強を見るための学校が出来たんですよ、どこだったかな、目黒区だったかな。どこだったかな。そこに図書館があると。いうんで、校長先生、そこに見に行くんですよ⁽²⁷⁾。

中村 わあ。

鈴木氏 私を連れて行こうとは言わなかったけれどもね、自分で見てきて、開架式のね、で、2階4教室の古い校舎があって、私立時代の。その2階の2教室をつぶして、で、カウンターを設けて、でこっちの部屋とこっちの部屋と真中と3つに分けて、ここが事務室で、ここが新聞雑誌閲覧室、で、カウンターを置いて、でこっちが閲覧室兼、要するに開架式の図書室ですよ。これはアメリカンスクールとまったく同じなんですよ。平面積なんかは。それで、完全接架式の図書館を作ってくれたんです。作った時に、県の指導もあったんでしょ。研究指定校を仰せつかる訳です。ところが、その頃の高等学校は、図書室なんか必要としていないですよ、すでにね。私自身そうだったけれど。講読していればいいのだから。だから調べるも何にもなくて。私自身、高等師範の4年間っていうけれども、最初の1年間ですよ、勉強したの。最初の4月18日に、ドー・リトルっていうあのアメリカの飛行機が日本の空へ来て爆弾を落としていく訳でしょ。それが日本初空襲になるわけだけれども。で、その1年間だけはね、どうか時間割どおりに学校へ行って講義を聞きましたけれどもね。

中村 はい。

鈴木氏 その後は、もう工場動員、あるいは農家の収穫の手伝いというので、ほとんど教室へ行かないんですから。で、最後の半年は、私は軍隊生活だし。で、勉強もしないし。で、教壇に立ったてね、何しやべっていいかわからないんですよ。もう指導法も教育指導法もねえ、あったもんじゃないですよ。でも、丹念に下調べして、教室に立って、50分の授業？終わりの

方に、早くしゃべりすぎちゃってしゃべることなくて(笑)、なんて、教員失格みたいなもんだったんですからねえ。で、そういう中で、研究指定校なんていわれたって、何を研究したらいいのかね。教科との結びつきなんていうのは、第一実践がないし、先生方も動きませんからねえ。まあ教員になって、2、3年の教員が、ベテランの先生方相手にして、その教育の研究だなんて言ったってね、こっち向いてくれませんか、誰も先生方。そしたら、やっぱり図書館の中での問題。私は目録に関心を持っていたから。そこで、学校図書館の目録と。特に件名目録中心に、実践したところをまとめただけ。そうしたら、本当にオオカゴ(?)の先生から、どやされてね。おまえのところの研究報告は何だって。そんなもの教育委員会の指導なんて無かったって、おまえ1人でだってやれることじゃないかって怒られてね。

中村 へえ。

鈴木氏 だから、あのまったくね、学校図書館という立場で、子どもが検索する為の目録としては、どうあるべきかっていう。もうその後、誰も彼もが言ったようなことが、まとめてあったわけだね。廿日出さんが、千葉県からも代表として出るっていうんで、出たんです。

録音テープ欠損部分(インタビュー時にノートに記した記録をもとに、2001(平成13)年5月1日に2度目にお会いしたときに、鈴木氏により確認された内容(後のち公開するという前提で、一部は修正され、また一部の情報は追加された))

- ・廿日出氏に依頼されて研究発表をしたことを契機に、昭和25年4月から全国SLA事務局の管理の仕事にあたった。
- ・全国SLAの設立は、松尾[弥太郎]氏が本当のリーダー(おそらく終始)で、実現。松尾氏のリーダーシップが方向付けとなっていた。松尾氏は力を終結させる人。松尾氏のそういう個性があった。初代・全国学校図書館協議会の初代会長の久米井束氏は、大部分は初代事務局長であった松尾氏と合意していた。ただ、各氏の個性で、少しは違っていたか?
- ・歴史の必然としての学校図書館運動のあらわれ。アメリカの指導があった。

国語、社会科などで、教科書だけの教育は駄目というところから、必然的に学校図書館が出てくる。ただ、日本の当時の人たちに合意があったかという疑問。日本の体制、制度に合致するものかの確認がなかったのでは。大正デモクラシーで言われた教育と、新教育、どう違う？

- ・このころ、日本教職員組合（日教組）に関わる教員は多かった。岩田斉氏、佐野友彦氏、椎野氏、松尾氏は日教組。鈴木氏は、日教組には、結局、関わらず。
- ・船橋から全国 SLA に放課後通っていたが、昭和30年、芦谷氏とともに学校を辞めた。なぜ学校をやめたかという、学校図書館の問題として、色々な問題が当時あった。分類、目録カードをどうするかとか（作業の分量から言っても大きかった）。件名目録を作り、司書教諭の先生からその労力を軽減する。それを国立国会図書館での処理に集中化するという考えが出た。国会図書館は子どもの本に対してそれをできていなかった。それを、何かがあって、学校図書館サービスセンターでやろうと（九州の？たしか文部大臣をやってた人だったか、が）考えた。それは、国会図書館の外郭団体のような形でやろうとしていた。この事業のために、松尾氏より、芦谷氏（分類）と、鈴木氏（目録作成）に声がかかった。松尾氏は、鈴木氏のお父さまのご自宅に挨拶に行った。人事の問題で、ある日までに態度を決める必要があったので、学校を先に辞めてしまった。しかし学校を辞めたかったわけではなく、ただもっと学校図書館運動に関わりたかった。はりきっていたから。
- ・松尾氏は戦中、占領する側の文官として東南アジアにいた。日本語教育を進めるために南方に派遣されていた。松尾氏と佐野氏は組合の関係ではないかと思っていたが、2人はよく喧嘩をしていた。議論と言えば議論だろうが。
- ・文部省：の深川〔恒喜〕先生は、温厚で、人当たりがよい。言動は官僚として普通だったと思う。説得力のある人ではあったのだが、一方で深川氏の描く学校図書館は現場で見ている疑問があるとも思っていた。
- ・松尾氏と深川氏の二人はたまたま学校図書館に興味と関心をもった。戦後の文化国家建設のために、生きていかなきゃいけないし、それで、これだっ

で見つけたのが学校図書館だったのだと思う。そして、戦後の教育に少しでも力を尽くしたいとも思っていた。その道は、松尾氏は自分で見つけた。深川氏はちょっと違うかもしれないけれど。

- ・学校図書館法制定と、系統的学習論はほぼ同時ではなかったか。文部省の体制が再び整ってきた時期でもあるのでは。学習指導要領を見ると、上の方では、学校図書館の位置づけはある程度はつきりしてきていると思う。

鈴木氏 日本はね・・・高等教育って言えばね。わーっと高等教育へ行くし。理科教育だって言えば、体系学習だって言えば、そっちへ行くし。

中村 生涯学習・・・いくらでもありそうです。

鈴木氏 学校図書館。その最たるものが、この占領期の学校図書館じゃないのかね。で、それがね。やがて火が消えて、元へ戻るんだけれども、何がしかのプラス面をね、残して行って、今の50年後の学校図書館があるんじゃないか。学校教育があるんじゃないかっていう。で、その下を流れてるっていうのが、その底流をなしているのが、その教育運動・・・これどっから出てくるのかなあと思うんだけどね。

中村 例えば、1960年くらいから、資料センター論とか教材センター論とか、折々出てきますよね。そういうのっていうのは、起爆剤的に、学校図書館の運動をもう1回盛り上げようっていう、文部省の意図だったっていう感じですか。何でこういう各種センター論っていうのが、出てきたんだとお思いですか？

鈴木氏 これはやはりあれじゃないですか。情報化社会っていうものが、っていうものへ移っていきますよね。今はもうその最たるものじゃないかって思うんだけど。そういうものが、教育の面で、教育行政の面で、無視できなくなってきたんじゃないのかな。こういうところ、進歩的って言えば進歩的なんだよね、文部省は。だけれども、この「教材センター論をめぐって」っていう座談会を読むと、ここに出てくるあれは、多分に批判的・・・⁽²⁸⁾

中村 うーん、皆さん、批判的ですよ。

鈴木氏 うん、批判的だしね、懐疑的だよ。だけれども、これまたこの時

私は入院していたことになってるんだよな。ホントは私が司会をやることに……。この頃、私が編集部長に代わるんだよな。で、代わりに松尾さんが務めているんですけどもね。これ、栗原〔克丸〕さんにしても、国分一太郎さんにしても、斎藤〔尚吾〕さんにしても、どっちかって言うと、反体制的な人ですよな。

中村 そうですねえ。

鈴木氏 まあ栗原さん、国分一太郎さん、なんかその最たるもんだけどね。この座談会なかなか面白い。しかし、国分さんなんかが言ってるように、うーん、ちょっとあれですね。私じゃないけど、被害妄想的なところがあるわな。しかし、教育行政っていうものを動かしてるのは、その……。国語問題に関するいろいろなあれなんかにしても、国歌国旗問題にしてもね、なんか大きく右旋回している感じだよな。戦前のような体制に戻るとは考えられないけども、国歌国旗問題にしても、危険は危険だと思うんだけどね。いつの間にか、随分戦前に戻ったんじゃない？いろいろな面で。

中村 はい。

鈴木氏 まああの教材センター論でも、座談会でも出ているけれども、やっぱり一番危険なことは、あれでしょうね。蔵書の構成でしょうね。蔵書の構成について、現に公共図書館なんか、僕が野田の興風会〔図書館〕にいる頃でも、市議会の中に、それぞれの分野を担当する、教育分野を担当する委員会だとか、あるでしょ。福祉の問題を扱うところだとか。それぞれの関係の施設をね、視察するんですよ、1年に1回くらい。その時にいろいろ言う訳ですよ、議員さんたちが、勝手にね。で、図書館で1番問題になるのが、なんでこの人の本が置いてあるんだっていう。例えば国分一太郎の教師論なんて言うのは、見つかったら、これは、どうなんだよ、館長、こんなのを置いとくのかよ、なんていう言い方が出てくるんだよね。必ず出てくるんですよ。だからそれを、それに対して堂々と反論ができる館長とね。びくついちゃって、おい、これ何とかしろって部下に言う館長と、出てくるんだよね。で、どこだっけ、あれ、神戸じゃなかったけど、どこか大都市だったけど。ダンボールの中に入れて閉めちゃったっていう問題が出てきますよね⁽²⁹⁾。学校だとね、あの、国の予算で本を購入する、あ

るいは市町村の予算で本を購入する。その時に、校長がタッチする図書館と、まあ一応校長のハンコはもらわなきゃいけない場合もあるでしょうけどね。その時に、校長のところ、こうひとつ問題が起きたんだよね。で、この教材センター論をめぐっていろいろ問題が出てくるのは、そこんどこですよね。

中村 はい、蔵書の問題。

鈴木氏 で、予算が限られている。何でも買えれば問題ないんだけど。そうでない、どうしても、教材っていう観点から、クレームがついてくるっていうことが出てくる・・・、恐れが無いと、言えないですね。だからそういう時に、それを受ける、あれがね・・・。やっぱり議員さんに言われるときついんでしょうな。僕は野田にいる頃は、特殊な立場だったからな。案外議員さんたちも何にも言わなかったけれど。

中村 ああじゃあ各種センター論が実現してこなかったのは、そういった問題点があったから・・・ですかね？実現されてこなかったって言うていいのかわからないんですけども。

鈴木氏 各種センター論っていうのは・・・

中村 その資料センター論、教材センター論って・・・出てきて、特集が組まれて、それで現場では別に何も変わらない訳ですよ、基本的には。それはなぜだったかって言う・・・。

鈴木氏 うーん、なぜでしょうねえ。この後何も記事なんか出てこない？

中村 うーん、出てこないですねえ⁽³⁰⁾。

鈴木氏 最後の結び、松尾〔弥太郎〕さん、それぞれ原稿をお願いして書いてもらうこともあるかわかりませんが、なんて書いてるけども⁽³¹⁾。

中村 はい、こういう特集は組まれますよね、こういう何とかセンター論が言われると。けど、それで終わっちゃうんですよ、1回か、2回か。で、現場で実際に、資料センター、教材センターとしてこれだけ上手くやりますっていうのも、ほとんどあがってこないですよ。

鈴木氏 ああこれがあるんじゃないかな。研究指定校。まあいい、よくやってるの。

中村 はい。田園調布小学校だとか、教材センター論、確かに・・・まあ出

ては来るんですけどね。そういうのは特殊じゃないかと。

鈴木氏 新潟では確か大会のテーマが資料センター論だっていうことは、記憶に残ってるよね⁽³²⁾。でも、学校図書館そのものについてのあれが・・・熱が冷めたのかな。あるいは、追いついていけなかったのかな。

中村 どこが追いついて行けないんですか、現場が？

鈴木氏 現場が。人は無い、金は無い、でさ。で、教材センターであろうが、資料センターであろうが、そんなのつきあってらんねえよ、ってさ。図書だけだってさあ。まあいわば体よく無視されちゃったって言う、現場に。何だ勝手なこと言ってって (笑)。

中村 ああ、分ります (笑)。じゃあ、アメリカの学校図書館の紹介っていうのも、何度もされてきている訳ですけども、それも、同じようなものですかね？アメリカ [の学校図書館] が良かったって。例えばメディアセンター (media center) 論だとか、そういったものなんですけど。

鈴木氏 これはちょっと言い換えれば、教材センター論は、メディアセンター論だよな。資料センター論であり、メディアセンター論であり・・・。こういう風に、学級崩壊だとかさ。お受験騒動だとかさ。そういう中で、学校図書館・・・。学校図書館は蜘蛛の巣が張ってる以上に・・・。この教材センター論をめぐっての中に、教材庫とかなんとか言うのが出てきましたよね、あれ。

中村 言えて妙ですか？

鈴木氏 うーん、言えて妙ですけども。教材庫なんていう物置小屋だよな。学校の教材庫なんて言うのは、昔の。ごちゃごちゃで (笑)。

中村 まあじゃあアメリカの例なんていうのも、遠い・・・

鈴木氏 うん、アメリカの学校図書館の例も・・・。アメリカの占領軍の指導によって展開されてるんですけども。アメリカっていう所は、僕は知らないですけども、ものすごく広いんですからね。それぞれに州によって法律も違うしっていうことがある訳だから。こういうやり方考え方がアメリカのどこの州にも行ってるとは、限らないんでしょ？そんなよく知らないけども。で、そのことは、終戦直後にも、聞かされたことがありますけども。何とか州って言ったね、この・・・戦後にアメリカの、お手本とし

たアメリカは、何だったかねえ。

中村 カリフォルニアですか？

鈴木氏 カリフォルニアか。

中村 わからない。ノースカロライナ？

鈴木氏 うん、ノースカロライナかな。なんかそういうこと、聞いた覚えがありますけどね。だから、日本には日本独自のね、あの学校図書館のあり方があったって、一向に差し支えないし。それこそ、そうあるべきだと思うんだよね。教育のあり方にしたって。大正デモクラシーの教育は、大正デモクラシー時代の、ひとつの教育理論であった訳で。日本には日本の教育風土があるならば、それにのっとって、しかもその、知育偏重じゃない、個性を尊重した、民主的な教育、であればいい訳だよ。うーん、何もかもが、ひとつのモデルに合わせること自体がね、おかしい話なんであって。日本の風土にあった、民主的な教育っていうのは、どういうものか、っていうことを。あの、先生方に研究してもらいたいし、学校図書館運動をすすめてる人たちにとってもね、そこに常にそこに足を置いて、学校図書館のあり方っていうのを見て欲しい。学校図書館がまず最初にあって、そして、教育があるんじゃない。これはもう誰だってそんなことはわかってるよって仰るでしょうけど。

中村 じゃあ、先生ご自身の学校図書館論っていうのは、戦後直後の船橋高校での、ご経験から、考えられたものですか。それとも例えば、文部省が言ってきたセンター論だとかにも影響を受けてきただとか……。そのアメリカの例にも影響を受けてきたっていうのを考えてみた場合には。先生ご自身の……。学校図書館論っていうのは……。

鈴木氏 それはやっぱりあれでしょう。終戦直後の船橋中学、高校の経験。勿論それが色濃く残ってるでしょうけれどもね。それだけで50年間やってきたわけじゃないですからね。それは、10年間の全国 SLA での、いろいろな人に会ったりね、いろいろな本も読んだり、人からも聞いたり、そういうのも入ってるでしょうしね。で、随分なんて言うか、その10年間の間には、全国いろいろ歩いて、見てきたしね。どこの図書館がどんなとかっていうんじゃないくて、そういう10や20じゃきかないですからね、10年間に

回らなかった所は、確か山口と山形かな？行ったことないのは。で、ひとつひとつのことは、全部忘れちゃってるけども、やっぱり、なんとなくね、日本の図書館ってものはね、見てるし。40年から53年までは、中小都市の図書館を通して、学校図書館を見ている面もありますね。

中村 じゃあ日本の学校図書館の現実っていうのが土台にあった上で、そして、わりと・・・悲観的だったりもする訳ですかねえ（笑）？

鈴木氏 この頃は何も書いてないでしょ？今も悲観的だってのはね、あの一、今ねえ、非常によくやっているとしますよ、学校図書館は。やっているとこは。で、恐らく、相当の格差じゃないですかね。それから、やっぱり、全国 SLA のリードっていうのも、相当現場にいい影響をあたえてるんじゃないですかね。ただ、それをね、まあ私が悲観的だって言われるならば、悲観的っていうのは、その、何度も言うように、日本の教育風土の問題、これ。この辺の問題がね、今、幸にして言うか、大きな・・・政治問題にもなってますよね。あるいは社会問題にもなってるけれども。それが、解決しない限りですね、学校図書館問題・・・。まあ私たちが、学校図書館はこうあるべきだと考えてる、教材センターであろうが資料センターであろうが、教育と密接不離な関係で、どこの学校にも、学校図書館がホントに生き生きして動いてるっていう、そういうような状況は、ちょっと生まれにくいんじゃないかなあと。受験問題がどういう風に・・・。ある意味じゃあこのへんが一番の、一番の問題じゃないかなあ。大学教育もひどいもんだもんねえ。

中村 そうですか。・・・そうだ、SLA を辞められて、あえて興風会図書館に移られたのはどうしてですか？

鈴木氏 どうしてだろうなあ。たまたまあそこにポストがあったからじゃないかなあ。

中村 じゃあ学校図書館運動に・・・。

鈴木氏 なんて見限ったかって（笑）？

中村 疲れたとかそういうんじゃないんですね（笑）？

鈴木氏 あのねえ、野田・・・野田の興風会っていうのは、醤油会社の作った、財団法人社会教育施設なんだけれども。そこでねえ、育英資金を出し

てるんですよ。あの元をただすと、大正11にまでさかのぼるんだけど、昭和3年に財団法人興風会ができる。で、大正11年から育英部の仕事をね、昭和3年に出来た後、すぐ引き継ぐんですよ⁽³³⁾。

鈴木氏 で、私が学校図書館へ入ったのは、そこの育英資金をもらって入ったんですよ。で、まあ、たまたま昭和40年に前の館長、佐藤眞っていうのが。これまた傑物でね。学校図書館法の制定にも関わっている・・・学校図書館法には関係無いんだ、その何だっけ、『学校図書館の手引』の運営委員なんかにも入ってるんじゃないかな。

中村 え？

鈴木氏 いや編集委員じゃなくて、運営委員⁽³⁴⁾？どっかそんなこと書いてあったと思ったな。まあ非常に、風格のある男だったんだけど。それが辞めてね、定年になって辞めて、その後、興風会の館長っていうか、理事をしていたのが、千葉県の中学校の校長をやって、千葉県の学校図書館協議会の初代会長かな？その頃私、関係あったから・・・。[千葉県] 図書館事業振興会と・・・。それで、今回の理事の神崎[邦治]先生っていうのが、うちの館長、今度定年で辞めるんだよ、で、誰か紹介してくれないかて言うから。俺、俺でよかったですかかって言ったら、松尾[弥太郎]さん離すかなあっていうことで、それで、大丈夫でしょうって言ったでしょう、僕は。何となく大丈夫そうだったからね。

中村 へえ。

鈴木氏 それはね(笑)・・・そんなことは言わないでおこう(笑)。それで、神崎先生、千葉県のSLAの会長として、全国SLAの理事かなんかしてたから、そういうこともあって、松尾さんに、野田の館長の図書館に鈴木君をっていうことを言ってくれたらしいんですよ。それで、あの、興風会に行くということで、SLA辞めたっていうことですよ。疲れたわけでもないし。

中村 でも、僕でどうですかっていうからには、それなりの何かあったわけですよ？

鈴木氏 うーん、だいたいが浮気なんでしょうね。浮気者だからね。

中村 そうなんですか？

鈴木氏 高等学校の教師が約10年、SLA が10年で、野田も10年でちょうどよかったんだけど、野田は17年になっちゃったかな。それから、大学教育だから。

中村 [筆者注：テープ欠損部分で話題になった] 学校図書館サービスセンターをやるうって言っていたっていうのは、それは駄目になっちゃったんですか。

鈴木氏 あ、それはねえ。国会図書館の外郭団体みたいな形ではじめようってことだったんですよ。けどね、うーん、そのサービスセンターにはね、私もよく知らない、何かがあったんです。それは聞いてない。芦谷 [清] さんも聞いてないんじゃないかな、彼なら知ってるかな。僕は知らない。何かがあったの。

録音中止部分

鈴木氏 それで、まあ松尾さんの責任で引き取ってもらったっていう。

中村 ああ、それで、それは立ち消えになっちゃったけれども、SLA に。そうか。で、SLA に入られてから、先生は、未来の学校図書館だとかそういうお話になさらないで、わりと目録だとかっていうことばかりお書きになってらっしゃいますよね。この先生がお書きになったものを見るとそれは意図して、ご自分で。

鈴木氏 いや、能力が無いからだよ。いや、もっとね、この50年間残念だったなあという気持ちがあるんだけど、その大部分は、勉強が足らなかったなあという。実践力に欠けたなあっていうことですよ。養成所へ入って図書館学に首突っ込んで。さっき言ったように、英語はさっぱり読めないし。外国の文献を読むでもなし。じゃあ翻訳書でも読んだかっていうと、まず読んでないしね。本は結構買ってありますけれどもね、皆まっさらで書棚に埋まっていますよ (笑)。勉強しなかった。あるいは、勉強は若い時やらなきゃだめですよ。ただ、勉強しない、現場・・・現場で、現場の、あるいは現場を見て、いろいろなことを考えただけの話でね。まったくお寒い限りですよ。

中村 いえいえそんなことは。すごい昔に戻って、最後にひとつふたつだけ残った質問をさせて頂きたいんですけど。学校図書館法制定運動への関わりってというのは、松尾先生が書かれていたものによると、芦谷先生と鈴木先生が、おふたりが、学校図書館法制定運動の時、協議会の研究部を守っておられたっていう風に書いてあるのですけれども⁽³⁵⁾、これはどうい
う・・・？

鈴木氏 研究部を持てた？

中村 を、守ってらしたと。

鈴木氏 研究部を守ってた・・・

中村 ええ、ありがとうっていう感謝の文章に書いてあるんですけども。

鈴木氏 ふーん。

中村 どのような形で・・・。ここなんですよ、このあたりに先生のことが書いてあるんですよ。

鈴木氏 はあはあ、まあ、そつのない文章ですな。・・・それはねえ、まあ芦谷さんは別としてもね、私のことについて言うなら、何にもやらないでいたっていうことだよ。

中村 いやいや、それは。この時すでにもう全国 SLA には結構入ってらしたんですよ？あの、中に入って関わってらしたんですよ？

鈴木氏 私？・・・それは。ああそうかあ、まだ船橋に籍があったのか。うーん。

中村 ああ、そんなことはないかな？もう SLA の中にいらしたか・・・いや、やっぱり船橋ですよ？

鈴木氏 うん、そうですよね。30年の4月から専従になったんだから。だからその前。学図法が通過するのが28年だから。そうですね。

中村 じゃあ、先生、あまりご自分は、仮に、関わらなかったとおっしゃるんだとしたら、誰がやってらしたんですか？学図法制定運動。

鈴木氏 松尾さん、佐野〔友彦〕さん。中心になったのは。そうだったのかな。いや、皆、内容については、侃侃諤諤っていうところはありましたよ。

中村 先生も？

鈴木氏 最初は司書教諭と事務職員と両方法案には載ったわけですよ。そ

それは結局文部省との折衝の段階で、最終的には事務職員をとられちゃうんだけれども。そういう大きくいくつかの運動があるけれども、その案を作るまでの段階では、それは、誰彼ってことなしに、まあ。佐野〔友彦〕さんも、大学、いや師範学校時代には、法律勉強した、社会学、社会科かな？あの頃は師範学校だったから？社会科で、法律のことは詳しくなりましたね。松尾さん、佐野さん、岩田〔斉〕さん。岩田さんは、どうだったのかな？

中村 じゃ、もっぱらその、行動して、議員さんとかにもあれしたりとかっていうのは、松尾先生と佐野先生で、ただ内容については、もう、当時中央に関わっていた人は皆が・・・

鈴木氏 ええええ。

中村 わざわざ集まって話し合いを持つわけですか？会議を。

鈴木氏 うん、あったでしょうねえ。地方からも随分、意見具申やらであったんじゃないですか？

中村 ああ。じゃあ先生はそういう中でも特に結構内容についておっしゃったから、ここで研究っていう言い方をされている？

鈴木氏 いや、そんなことないでしょう。そりゃ研究部・・・だから、そういうの、あんまり意味のない言葉ですよ。

中村 本当かなあ。その法制定の時の、深川氏、大西〔正道〕氏、町村〔金五〕氏とかっていう、その外側にいて、でも助けてくれた人たち、彼らの行動とかについて覚えていることとかありますか。その役割みたいなものって。

鈴木氏 うーん、あんまり関係していないからねえ。それこそ。

中村 そうですか。この議員さんたちっていうのは、内容については、どうこう？言わないですよ。

鈴木氏 いや、社会党右派の代表で、出てきてたわけですからね。だから、社会党右派としての考え方はあったんです。

中村 そうですか。

鈴木氏 今、どう比較してどうのこうのっていうのは、ちょっと私も言えないけれども。あの、誰だっけ、社会党の代議士。

中村 大西先生ですか？

鈴木氏 うん、大西正道。それは、あの、社会党右派だからね、あのころ4派構成だったから。社会党右派、それから左派と、それから自由党と改進黨だったから。その4つが大きな・・・。だから社会党右派としての考え方。これはきちっとしたのもっていたわけですよ。だから、それと、SLAとの、すり合わせ、案のすり合わせっていうのがあったでしょうね。で、いよいよそれでいってことになって、国会へかけられて、最終的に委員会を通すっていう時に、文部省のクレームがついてる訳ですよ。事務職員を切るとかね。学校図書館審議会っていうのが、置かれるでしょう？じきに消えますけれどもね。その学校図書館審議会を文部省に置くことは勿論だけれども、各都道府県に置き、都道府県にも置き、といったような、案だったけれども。学図法はね。だけれども、これも文部省からチェックを付けられて、切らなければ、文部省はOKを出さないといったようなことがあったり。

中村 そうか。じゃあ SLA 側で、法制定への動きが出てきたのは、どうい
ういきさつなんですか。

鈴木氏 やっぱり法律作らなけりゃ、結局駄目だと。学校図書館運動は伸び
ないっていう、ことですよ。言えばそれだけです。

中村 それでその時に、松尾先生がわりと行動力があって・・・。例えば社
会党に話をつけたのも、松尾先生なんですか？

鈴木氏 そのへん、どうなのかなあ。学校図書館法に、というものについ
ては、社会党は、随分あれがあったんですよ。関心が。

中村 それは関心を持たせたのではなくて、関心がもともとあって。

鈴木氏 そうじゃないですか。まったく白紙で引っ張り込んだっていうこと
じゃないと思いますよ。文部省、いや社会党の、右派の中、いや左派の中
にも、あの、保守系よりは学校図書館に対する関心が強かったんじゃない
かと思いますけれどもね。

中村 はあ。で、深川〔恒喜〕先生は学校図書館法については、どのような
まあ文部省は、あまりねえ、こういう風な対応ですけれども、深川先生ご
自身は？覚えてらっしゃいますか？

鈴木氏 文部省にいるんだから、積極的に、どうのこうのは動かなかったんじゃないですか。上の方がいったいどういうことを考えているのか。だから個人的な心情から言ったら、通ればいいなあと思っていたかどうかわからないけれども、先に立って、旗を振る訳には行かないでしょう。一事務官だもの。

中村 深川先生ご自身の心情が見えてこないような方なんですか。

鈴木氏 いや、そうじゃないの？

中村 他には何か、法制定時のおもしろいエピソードとか(笑)。ありますか？

鈴木氏 誰も言わないでしょう。

中村 言わないです。言わないっていうか、芦谷先生とかは、他の話を・・・
どんどん抜けちゃった気がして、もう一度うかがいたいんですけども。

鈴木氏 うーん。

中村 何かありますか。CIE ってまったく、法制定には、CIE というかアメリカ側は、関わってくれてないんですよね。

鈴木氏 無いんじゃないのかな。アメリカさんの影は全然なかったんじゃないのかな。

中村 そうか、じゃあそれより前、占領期が終るまでに、CIE の影響はやっぱり占領期が終る時点で切れているって考えていいんですね。

鈴木氏 うーん、どうなんだろうな。日 [本] 図 [書館] 協 [会] は、どうだったっけね。あれは一、日図協・・・。日図協は、あれじゃないの？単独の学校図書館法を作るんじゃなくて。

中村 総合法ですか。

鈴木氏 うん、あの図書館法の中に包含すべきだって声が、公共図書館の中
では結構強かったんじゃないのかな。これについては記録があるでしょ？⁽³⁶⁾

中村 あ、はい、少しは。それは先生ご自身も聞いたことがありますか？当時。図書館・・・総合法としての図書館法の方がいいっていうのは。

鈴木氏 ないですね。また聞き・・・でしょうな。

中村 あの、もうひとつなんですけれど、それよりもまた前になってしまうんですが。図書館教育研究会っていうのがありますよね。先生が、編集責任者として『学校図書館通論』⁽³⁷⁾ を出版されているんですけども、その

会がありますよね？その会って、1949年の春に、CIE のフェアウェザー (Jane Fairweather) 女史の指導の下に開かれていたってということなんですけども⁽³⁸⁾、先生はそれには参加されていたんですか？

鈴木氏 フェアウェザーさんがいらっしゃった頃は、関係していません。

中村 そうなんですか。

鈴木氏 彼女が帰った後、阪本一郎先生や、何人かの方で、研究会がもたれていたんですよ。で、その途中から入ったんです。で、一番最初のは、『学校図書館通論』じゃないよね？私が関係したのは。

中村 ああそうですか。何でしょう？

鈴木氏 たしか、あれ全5冊でた内で、4冊目が図書の整理だったのかな？3冊目かな？

中村 5冊目ですね、通論は。

鈴木氏 5冊目が通論になってる？通論が一番最後に出たのかな？そうすると。

中村 はい、そうだと思うんですけども。じゃ、その前に？

鈴木氏 図書の整理の⁽³⁹⁾・・・から関係したんじゃないのかなあ。

中村 すみません、勉強不足で。じゃあ、初期の勉強会には参加されていない・・・

鈴木氏 うん、それでねえ、うーん、僕は原稿を書く書き方とか、まとめ方とかっていうのをホントに教えてもらったのが、その勉強会だったよなあ。原稿書いてねえ、分担した原稿を持っていくとね、あの頃は、教科書株式会社って言ったのかな？今の学芸図書株式会社、職員が、社員が、それをガリ版で印刷してくれてね。それを集まったメンバーで、読んで、いろいろ批判したりなんかするんですよ。で、またそれを書き直して、で、原稿を固めていくというようなことを、やらされたんですけどもね。それでもって、文章の書き方っていうのを、まとめ方っていうのをね、教えられたなあ、と思うんですけどね。船橋高校の授業を終ると、とことこねえ、神田小川町に会社があったけれど、そこで。

中村 研修会議を。

鈴木氏 途中でパチンコ屋があつてねえ、パチンコはじめたら面白くなっちゃっ

て、出るんで出るんで。とうとうねえ気が付いたらもう、会議が終る頃になっちゃって(笑)、そのまま帰っちゃったことあったけど。それ以来パチンコやってないけどなあ。

中村 ああそうですかあ(笑)。後悔されて。

鈴木氏 うーん、後悔したわけでもないんだけどな。今のパチンコはもうまったく。

中村 おもしろくない(笑)?うーん、そうか。じゃあ、先生は、フェアウェザーを見て、記憶にない?

鈴木氏 一度見た。一度見たな。

中村 何処で見たんですか?

鈴木氏 阪本[一郎]先生が通訳してたからなあ、何だったかなあ。彼女のことを私、覚えているのはねえ。よく学生にも話したんだけど。机の中にいつも糸と、縫い針と縫い糸を置いておきなさい。グラウンドを歩くと、必ず、ボタンの、金ボタンの1つや2つ落ちているでしょう?それを拾って、引出しへ置いておきなさい。で、男の子が、ボタンを落としているのを見つけたら、それを引き出しの中から取り出して付けてあげなさい。図書館の本質的なサービスでは、それはないでしょうけれども、もし、本質的な意味でのサービスが出来ない場合には、そういう関係のないことでもいいから、サービスをしてあげるのが、図書館員のサービスなんだ、と。なんかわかったようなわからないようなところもあるんだけど。そういうことをね、おっしゃったのがね、まあ、それだけなあ。僕が完全に覚えているのは。

中村 それは阪本先生の通訳の会で聞いたんですか。

鈴木氏 そうそう何か講演会みたいな。

中村 講演会・・・。それは何年頃とかおぼえてらっしゃいますか?

鈴木氏 いやー、いつ頃かなあ。それからもうひとつ、これは誰だか、名前覚えてないんだけど。日比谷に[アメリカ]文化センターっていうの、ありましたよね。で、文化センターの本が紛失して仕方がないんで、出入り口に関所を設けて、あの一、チェックをしたい。ところがそれで、あの英語の辞書がありますよね、大きな。何辞書って言ったかな。英英辞典。

あれが、こんなに厚いんですよ。私も学校にあったんですけど。そういう辞書が無くなるんでね、それでも無くなる。だけれども、だからと言って、閉架式がいいと、考えては、短絡してはいけませんと。本は無くなるものだと。でも、全部無くなることはないでしょう、それだけ言ったかは覚えてないけれどもね。あの、クローズするよりも、無くなることを恐れちゃいけないと、それが図書館のサービスだと、その2つのね、サービスについてのね、考え方。どんな時にどんな人から聞かされた話なのか、覚えてないけどね。

中村 フェアウェザーじゃないんですか？

鈴木氏 うん、うん。その一、開架式と、開架式の理念について語ったのは、誰がどんなところでしゃべったのか、全然覚えてないけれどもね、これ、女性でなかったことは確かだと思うなあ。

中村 で、先生、オズボーン (Monta L. Osbone)、オズボーンっていう CIE の係官だった、先生が [全国学校図書館協議会の設立総会時の] 研究大会で発表された前に、講演されてた人の記憶は無いんですね。

鈴木氏 ないない (笑)。

中村 じゃあ、先生は IFEL には参加していらっしゃいますか？

鈴木氏 参加してません。

中村 じゃあエーカーズ (Susan G. Akers) とか、ヘレン・フェファナン (Helen Heffernan) とかも、先生は全然記憶にない？

鈴木氏 関係ありません⁽⁴⁰⁾。オズボーン、オズボーンっていう名前は聞いたよね。

中村 そうですか、この人は図書館担当官じゃないんですよ。フェアウェザーは図書館担当官ですけど、CIE の。で、なぜこのオズボーンっていう人が、図書館担当官じゃないのに、これだけ学校図書館運動に関わってくれたかっていうのは、大きな研究テーマとしてもちあがってるんですけど。十分な史料が出てこないっていう状況で。

鈴木氏 ほう。もう生存してないの？

中村 というか、見つけれられていないんですよ。で、社会科教育。社会科をこの人は、日本に作った人なんですよ、だから、それと、CIE の側か

ら見たときに、社会科と学校図書館はつながっていたんじゃないのか、っていうのが、あるんですよ。

鈴木氏 うん。

中村 どうですか？先生の中では、社会科っていうものと、学校図書館はつながりますか？その戦後直後。

鈴木氏 うーん、地理・歴史もひっくるめて社会科でしたよね、出発はね。わりあい素直に受け入れられたんじゃないのかなあ。

中村 例えば学校図書館に熱心だったのは、社会科の先生が多かったとか、そういう印象はありますか？

鈴木氏 それはありますよ。

中村 ありますか？

鈴木氏 社会科と国語の先生ですよ。あの一、日図協の百年史⁽⁴¹⁾、学校図書館は私が書いてるんだけど、ほとんどがね。尾原さんが書いてたのを、尾原さんが亡くなっちゃったんで、最終的に書いたのは私なんだけども。そこには、社会科と国語の教師が、圧倒的に多かったと。社会科と国語で導入されたってことが、導入ってのは、おかしいけどね。学校図書館をはじめた先生を見ると、社会科と国語が圧倒的に多いっていうのは、象徴的じゃないのか、って書いてあるんだけどね。だから要するに、あの一、社会科、国語科の場合には、教科書中心でない教育になれば、当然、いろいろな資料が必要になる、のであろうと。で、そこから、まず、社会科の先生あるいは国語の先生が、図書館の必要性を痛感して、その結果として、学校図書館運動の方に首をつっこむと。こういうことになったんじゃないかと、だから、ひっくり返せば、学校図書館っていうものは、学習指導の上で資料を必要とする教師がいて、はじめて図書館が生きてくると。学校図書館は存在意義を持つんじゃないかと、そういうことを言おうとしたんだけどね。松尾さんは国語の先生だし、佐野さんも社会科だし、今村〔秀夫〕さんも・・・、今村さんは何だろう。

中村 数学じゃないですか？

鈴木氏 そりゃまあ難しい。おもしろいですねえ。

中村 社会科って比較的、世界的に見ても、新しいとか、聞いたことがあり

ます。

鈴木氏 ああそうですか。

中村 だから？社会科の成立と学校図書館の成立っていうのはつながるのかも・・・しれません。

注

- (1) 一連のインタビューの後に、2004（平成16）年に、全国学校図書館協議会『学校図書館50年史』編集委員会編『学校図書館50年史』全国学校図書館協議会、2004. が出て、インタビューで話題になった歴史的なできごとの多くが、当時を知る執筆者らの手によって、再び整理され、まとめられた。しかし、このインタビュー記録は一人ひとりの先生方の経験、その理解と記憶の記録として、貴重なものであると考え、公開をすることにした。
- (2) 「芦谷清（1995年5月現在）」「作家・執筆者人物ファイル」日外アソシエーツ、1997.
- (3) この経緯については、芦谷清「図書館養成所と白鷗高校の頃」『学校図書館』No.362、1980.12、p.27-28. にも記されている。
- (4) 鳥生はこれについて、「昭和3年4月1日東京府立第九中学校が創設された。時あたかも御大典の歳であったので、校長常田宗七氏はそれを記念して一大図書館を作ることを内外に宣言された」と述べている（鳥生芳夫「戦前の学校図書館」『図書館雑誌』Vol.70、No.7、1966.7、p.11-14. 引用は p.13.）。
- (5) 鳥生はこれについて、「この〔東京府立第九中学校の〕図書館づくりの責任者を若輩の私ごときにお命じになった校長のお考えが今もってわからない。なにしろ何の経験も知識もない。手本も見本も何もない。途方にくれた。2年かかってやっと昭和5年5月5日に一教室を仮図書室として店開きした。何はともあれ、上野の帝国図書館に日参してご指導を仰いだ。松本喜一館長には親切に何かと教えていただいた。青山〔大作〕、加藤〔宗厚〕、岡田〔温〕ベテラン館員をご紹介下さって、詳細はこれらの専門家のご支持に従った」と述べている（前掲4）。引用は p.13.）。

- (6) 鳥生はこの科目と思われる作業科の時間を「図書館科」とか「図書館作業科」と呼んで、次の論考中でその内容に言及している。鳥生芳夫『本の話』健文社、1944. ; 鳥生芳夫「東京府府立第九中学校記念文庫に就いて」『図書館雑誌』第28年第1号、1934. 1、p.14-16、31. ; 鳥生芳夫「師範学校と図書館学」『図書館雑誌』第28年第11号、1934. 11、p.10-17. ; 前掲4).
- (7) 鳥生芳夫『私たちはこうして学校図書館を作りました』萬世書房、1949.
- (8) 1924年に「教育の世紀社」を母体として設立され、1936年に閉校した。1933年に野村芳平衛が主事に就任して、「生活教育」を提起するようになった。「子供図書館」が児童たちによって経営されていたとされる(君塚仁彦「池袋児童の村小学校における「学校博物館」活動：博物館学の視点から見たその意義」『東京学芸大学紀要1部門』No.49、1998、p.13-25、などを参照)。
- (9) 木下竹次『学習原論』目黒書店、1923.
- (10) この頃の話は、芦谷清「片手間では間に合わない：兼任司書教諭の声」『学校図書館』No.14、1951. 12、p.30-32. にも記されている。
- (11) 『学校図書館』No.83、1957. 7の特集「教科学習と学校図書館」(p.34-62) のことであろうか。掲載された論考の中に、扇谷尚「学習形態と学校図書館：問題解決学習と系統学習をめぐって」(p.34-39) がある。
- (12) 全国学校図書館協議会社会科学習資料解題編集委員会編『社会科学習資料解題：小学校編』全国学校図書館協議会、1961. ; 全国学校図書館協議会社会科学習資料解題編集委員会編『社会科学習資料解題：中学校編』全国学校図書館協議会、1961.
- (13) 1960(昭和35)年に、鹿児島県立図書館長の椋鳩十が、教科書以外の本を、子どもが20分間くらい読むのを、母が、かたわらにすわって、静かに聞くことを、できるだけ毎日行い、という読書運動を、県内に大規模に実施しはじめた。(椋鳩十『母と子の20分間読書』あすなる書房、1971. 引用は p.9)。これを契機に読書運動が全国に広まったと言われる。
- (14) 正確には雑誌記事の中でであった(芦谷清「学校図書館研究の十年」『学校図書館』No.105、1959. 7、p.17-27. 次の引用は p.18.)

はなばなしく開幕された新教育も、程なく後退しはじめた。(中略) これは、一つには25年頃から徐々にあらわれはじめた教育行政の影響ともみられる。(中略) また、入学試験の競争が次第に激しくなったことも一因であろう。(中略) しかし、これらの要因のほか、教師自身が骨が折れてやりきれないとして、さじを投げてしまったということに、もう一つの大きな原因があると思う。

- (15) 日教組は、委員長・荒木正三郎の名前で、文部大臣・高瀬荘太郎に宛てて、学校図書館の設置・充実を求める要望書を1949(昭和24)年3月26日付で提出している。また、独自の学校図書館基準も発表していた。(深川恒喜「学校図書館基準：成立の経緯とその後の動向」『学校図書館基準：解説と運営』全国学校図書館協議会編、時事通信社、1950、p.164-200.)
- (16) 前掲14).
- (17) 文部省編『学校図書館における図書以外の資料の整理と利用』大日本図書、1960.
- (18) 井澤純『読書教育原論』全国学校図書館協議会、1989.
- (19) 例えば、1969(昭和34)年10月30日に開催されたという座談会では、芦谷氏は、研究指定校の研究計画を見ても、「まず、はじめの1年間は、資料の整備をする、次の1年間で、この資料をいかに授業で使うかといったかたちが多いわけです。そうではなくて、いまある資料について、その使いかたを研究する、そのなかで、必要な資料を逐次補うといったやり方が、順序じゃないかと思います。授業と有機的な結びつきをもった図書館というのは、かくのごとくでございますといったかたちでなく、資料を整備してから研究をはじめるといった考え方が、多いのではないのでしょうか。」と問いかけている。(「座談会 学校図書館の理念を探る」『学校図書館』No.231、1970、1、p.9-30、引用は p.18)
- (20) 須藤喜三郎「豊島区立学校図書館の概況」『学校図書館』No.40、1954、3、p.18-23. に、1949(昭和24)年末に椎名町小学校から学校図書館設立の申し出があり、それへの区費による経費支援を決定したと平行して、区議会で、「全区立学校に図書館を設置する方針を決定」し、「図書建設費は区費とし内部設備及び図書購入費はPTA負担とした」とある。この記

事に、須藤の肩書きは「区長」とある。

- (21) 「鈴木英二（1986年6月現在）」「作家・執筆者人物ファイル」日外アソシエーツ、1997.
- (22) 廿日出逸暁『図書館活動の拡張とその背景』図書館生活50年記念刊行会、1981. 収載の「廿日出逸暁略年表」(p.384-385)によれば、ライプチヒ大学附属図書館学校を卒業し、ライプチヒ大学哲学部教育学科を修了、博士号を取得してのち、1933（昭和8）年1月から約5か月、「財団法人日独文化協会資料室 主任司書」とある（p.384）。鈴木氏は、この本の「刊行のことば」を書いている（p.i- ii）。
- (23) 1948年2月17日に千葉県鴨川市で『手引』の伝達講習と言われる学校図書館講習協議会が開かれた後、「千葉県に於ても、これが講習会を兼ねて、同年7月から8月にかけて、匝瑳高、佐原高、木更津高、船橋高及び長生高の5ヶ所で、各々同2日間、「学校図書館の手引」に即して、主に目録、分類、製本について実施したが、各会場多数の参加者、即ち先生及び生徒（図書委員）により、極めて熱心に行われた。この講習会が導火線となって、学校図書館と公共図書館とが一体となって、県下図書館事業の完全な発達を遂げたいという、機運が出来、所謂同志的横の関係も生じ、昭和24年12月10日「千葉県図書館事業振興会」が結成される運となった」と、廿日出は記している（廿日出逸暁「中央図書館と学校図書館：千葉県の事例」『図書教育』Vol.2、No.9、1950.4、p.24-28. 引用はp.27）。
- (24) このことについて鈴木氏は、2001（平成13）年5月1日に2度目にお会いした際に次のように回顧して語られた。

千葉県学校図書館協議会（千葉県SLA）が設立の際、事務局幹事となったが、これで廿日出氏は、心の底で鈴木に裏切られたと思っていたのではない。裏切られたというのは、廿日出氏は振興会を作って、学校図書館を一緒にして、両方を見るようにしてやってきた。ところが鈴木は振興会を忘れて千葉県SLAの設立に走った、と。表面的には何も無かったが、そのへんがしこりになっている点もあったのではないかと？
- (25) これについては、椎野正之「回顧日本の学校図書館8：鴨川天理学校図書館講習協議会」『学校図書館』No.219、1969.1、p.53-56. にも書かれ

- ている。
- (26) [図書教育研究会編集部]「全国学校図書館協議会結成式」『図書教育』Vol.2、No.4、1950.4、p.57.には、「目録編成上の諸問題」とあり、[『学校図書館』]編集部「学校図書館運動の展望：全国学校図書館協議会の成立」『学校図書館』No.1、1950.9、p.54-62.には、「学校図書編成目録上の諸問題」とある。
- (27) 山口校長の逸話を含め、船橋高校での学校図書館設置に関しては、鈴木英次[筆者注：「二」の誤りであろう]「本校学校図書館の経営を語る」『図書教育』Vol.2、No.10、1950.12、p.46-49.にも書かれている。
- (28) 「座談会 教材センター論をめぐって」『学校図書館』No.127、1961.5、p.8-24.
- (29) 1981(昭和66)年に愛知県高等学校教職員組合が、「愛知県立高校図書館で管理職の一方的介入によって購入禁止となった図書リスト」を公表したこと(「愛知県立高校図書館における選書への介入」『図書館の自由に関する事例33選』日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会編、日本図書館協会、1997、p.34-40.参照)を指してか。
- (30) 実際にはこのあと『学校図書館』No.130、1961.8で、「再び、教材センター論をめぐって」(p.8-37)という特集が組まれていた。
- (31) 松尾弥太郎が座談会の最後に、「今日の座談会は、一応、これで終わらせていただきこのあとは、この座談会での話し合いをひとつの核におき、読者諸兄の自由登壇をお願いしたり、また先生方に、今度は原稿執筆のかたちで再登壇をお願いしたりして、実践の各論にはいっていきたいと思うのですが、如何でしょうか」と述べていたことについて(「座談会教材センター論をめぐって」No.127、1961.4、p.8-24.引用はp.24.)。
- (32) 1961(昭和36)年10月3-5日に新潟で開かれた第12回全国学校図書館研究大会は、「資料センター」をテーマにしていた。
- (33) 興風会図書館については、鈴木氏が、図書や雑誌記事を著している。たとえば、鈴木英二『財団法人興風会図書館の50年』興風会、1991.や、鈴木英二「財団法人興風図書館：歴史と経営」『現代の図書館』Vol.26、No.1、1988.3、p.2-6.。

- (34) 佐野眞は『学校図書館の手引』の編集にはおそらく関与していないが、1948（昭和23）年7月に、学校図書館協議会の委員であった（中村百合子『占領下日本の学校図書館改革：アメリカの学校図書館の受容』慶應義塾大学出版会、2009. の第5章を参照）。
- (35) 松尾弥太郎「学校図書館法」が生まれるまで『学校図書館』No.34、1953. 9、p.22-26. に、「はげしい国会闘争のあいまを見ては、協議会の研究部をずっと守り続けて、この方面では盤石のかまえを見せてくれた、鈴木英二、芦谷の両幹事」（p.23）とあるのを指して。
- (36) 1953年の学校図書館法の制定までには、法的に公共図書館と学校図書館がいかなる関係にあるべきかがたびたび問われていた。まずは1950年の図書館法制定前の議論において、学校図書館を含めるかどうか議論されている。例えば1947年の日本図書館協会第1回通常総会の記録には、河合博が、「今問題になっているのは1、公共図書館法とするか、2、図書館法とするかと云う事である。ネルソン氏は「先ず公共図書館法を出し、学校図書館法は他の法規に入れたらよい」と云った」と発言したように記されており、これに関連して複数人が意見を述べ、「公共図書館法」を作るべきとして議論が落ち着いている（『日本図書館協会第1回通常総会記事』『図書館雑誌』Vol.41、No.2、1947.12、p.5-17. 引用は p.14.）。その後には、学校図書館法の制定前に、「公共図書館側の一部から、学校図書館を含む趣旨は賛成、但し単独法反対という意見もあった。現行図書館法の改正で行くべしというのである」といった意見が挙がっていたことを、松尾が書き残している（松尾弥太郎「学校図書館法案解説」『学校図書館』No.30、1953. 5、p.8-15. 引用は p.9.）。
- (37) 図書館教育研究会『学校図書館通論』学芸図書、1964. 鈴木氏が「編集責任者」のひとりであったシリーズ「5冊目」の本とは、図書館教育研究会『学校図書館の活動：運営と管理』学芸図書、1954（学校図書館学叢書第5集）、の誤りである。しかし、コピーを示して話をしていたので、鈴木氏は話題が「図書館教育研究会」であったことを認識されていたと思われる。
- (38) 図書館教育研究会『学校図書館学概論』学芸図書、1950. の「はしがき」

- はフェアウェザーによるものであり、また同書には、「わが国の学校図書館の現状は、まだ生みの陣痛期にある。アメリカではこれに対して逐次数名の指導官を送り、熱心にその健全な誕生を援助してくれたのであるが、1949年の春以来、その1人であるフェアウェザー女史は、とくに在京の有志を集めて毎週1階、非常な好意と熱意をもって懇切な指導を与えてくれた」（同書所収「記」、p.245-246、引用はp.245.）とある。記された「今回の討議に直接間接に参加したもの」（p.246）のリストには鈴木氏の名前はあがっていなかったが、その後図書館教育研究会の有力メンバーになっていたらしい鈴木氏がなんらか関わっていた可能性があると思い、尋ねた。
- (39) 図書館教育研究会編『学校図書館資料の整理』学芸図書、1952（学校図書館学叢書第3集）。
- (40) しかし、IFELの講師としてエーカーズが来日した際に行われた座談会で、鈴木氏が潮木孝吉氏と共に速記者を務めていた記録がある（「座談会学校図書館の進路：I. F. E. L. 指導官エーカーズ女史にきく」『学校図書館』No. 3、1950.11、p.30-35.）。
- (41) 日本図書館協会『日本図書館協会の百年：1892-1992』日本図書館協会、1992. の「IV 学校図書館」（p.351-396）の「第二章 第二次世界大戦後の学校図書館」（p.359-376）は、尾原・鈴木氏の連名執筆になっている（p.376）。

（なかむら ゆりこ。2009年6月17日受理）